



麗澤海外開発協会

50年の歩み

The 50th Anniversary since 1971



一般財団法人 麗澤海外開発協会
Reitaku Overseas Development Association



麗澤海外開発協会

50年の歩み

The 50th Anniversary since 1971



一般財団法人 麗澤海外開発協会
Reitaku Overseas Development Association

これまでの実績を踏まえ、 心の通い合う国際協力を推進する ——麗澤海外開発協会創立50年を迎えて



一般財団法人麗澤海外開発協会
会長

廣池 幹堂

廣池幹堂（ひろいけ・もとたか）

1950年、初代会長・廣池千太郎の長男として東京に生まれる。1974年、東北大学教育学部を卒業後、ロンドン大学教育研究所に留学。麗澤大学助教授、同ワシントン事務所代表、麗澤大学学長を経て、現在、公益財団法人モラロジー道德教育財団（前・モラロジー研究所）理事長、学校法人廣池学園（麗澤大学、麗澤中学・高等学校、麗澤瑞浪中学・高等学校等）理事長、一般財団法人麗澤海外開発協会会長、一般社団法人日本道経会名誉会長。著書に『世界に誇る日本人——21世紀に伝えたい日本の心』[玲瓏のこころ——歴史に学ぶ叢書]（以上、モラロジー道德教育財団）、『人生の名言・歴史の金言——現代人の心に効く55の言葉』（育鵬社）、『国家と道德——令和新時代の日本へ』（文藝春秋）等、編著に『「三方よし」の人間学——廣池千太郎の教え105選』『「三方よし」の経営学——廣池千太郎の教え99選』（以上、PHP研究所）がある。

麗澤海外開発協会（RODA/Reitaku Overseas Development Association）は、総合人間学モラロジーの創建者・廣池千九郎（法学博士・1866～1938）の遺志に基づき、「開発途上国において文化・経済の発展に協力するため、国際協力活動を通じて、世界の平和、人類の安心と幸福の増進に寄与すること」を目的に、昭和46（1971）年、外務省所管の財団法人として設立されました。以来、半世紀にわたって開発途上国への貢献活動に取り組み、平成25（2013）年4月には内閣府より一般財団法人として認可され、令和3（2021）年に創立50年を迎えました。長年にわたってご支援・ご協力を賜りました多くの方々と、海外での事業活動に誠心誠意ご尽力いただきました方々に心から感謝と敬意を表するものです。

初代会長の廣池千太郎は、当協会の設立にあたり、次のように述べております。

「私どもは、つとに世界人類の安心、平和、幸福を念願して道德科学（モラロジー）を創設し、全世界に向かって精神的改革を呼びかけた学祖廣池千九郎博士の意志にもとづいて、財団法人道德科学研究所（現在のモラロジー道德教育財団）ならびに学校法人廣池学園

を設置し、道德科学を根幹とする社会教育、学校教育を広く展開し、微力ながら今日まで、国家ならびに世界の平和をめざして努力してまいりました。

しかし今日、深刻な政治的・経済的諸問題と取り組む開発途上国の姿を見ると、今やそれらの諸国に対して愛の手を差し伸べることは、幸福と繁栄を享受しているわが国日本の果たすべき当然の義務というべきでありましょう」

最初の事業は、当協会設立の契機ともなったラオス王国における養蚕開発事業でした。麗澤大学中国語学科教授・故奥平定世教授（協会設立時の常務理事）による調査・指導によって、昭和39（1964）年にビエンチャン近郊にレイタク・カンバイ農場が設立されました。その後、廣池学園から指導者が派遣されて農場開拓にあたり、野菜の栽培や鯉などの養殖、養蚕事業に着手しました。当協会の設立後には麗澤の卒業生が派遣され、本格的に養蚕開発事業が行われました。事業は拡大されて大きな成果をあげましたが、昭和51（1976）年に、同国の政変により事業中止のやむなきに至りました。

次の事業は、中米のコスタリカ共和国における花卉園芸植物の栽培事業でした。昭和53（1978）年、当時の国際協力事業団（JICA）からの融資の承認を得て、現地法人レイタク・コスタリカ株式会社を設立して開始しました。現地法人の社長には長谷虎治氏（当時・長谷虎紡績株式会社社長）、役員には三重県の植物園経営者・赤塚充良氏や米国カリフォルニア州サリナス市在住の農場経営者・内田善一郎氏等に就任していただきました。

当初はカーネーションのウィルス・フリー（無菌）苗栽培に取り組み、その生産技術を確立しましたが、その量産体制と輸出は断念せざるを得ない状況となり、観葉植物の栽培と輸出事業へと転換いたしました。特にドラセナ（幸福の木）の日本への輸出事業は大成功となり、コスタリカの植物栽培技術の向上と輸出産業の育成に多大なる貢献をしました。

平成3（1991）年、当協会はコスタリカにおける使命は達成できたと判断し、農場

用地と施設をコスタリカの公的機関に寄贈して同国における事業を閉鎖しました。この経験から、「開発途上国の人材育成、技術指導を行う」という協会設立の目的を再確認し、平成4(1992)年に事業計画検討委員会を設置して、タイ、ラオス、ネパールにおける調査を行いました。その結果、平成5(1993)年から、ネパール王国で進められていた鍼灸とマッサージの技術者の養成学校「東洋医学専門学校」を支援しました。同校は、畑美奈栄氏の献身的な活動によって設立され、今日ではネパール人による自主独立を果たし、数多くの卒業生を送り出しています。また、畑氏の活動を支え、鍼灸師育成の支援ともぐさ製造技術の指導に取り組んでいるNGO「ティテパティよもぎの会」に対して人的・資金的な支援を行い、ネパールにおける無料巡回治療(ヘルスキャンプ)等への支援も進めてきました。併せて、平成16(2004)年には「ティテパティよもぎの会」のクリニック兼もぐさ工場建設への支援も行いました。

さらに、平成14(2002)年からは、タイ北部チェンライ県で生活が困窮している少数民族の子供たちの生活・教育支援施設を運営しているメーコック財団(旧メーコック・ファーム)への支援と助成を行い、平成15(2003)年には、当協会の理事・副会長として貢献されていたラオス出身の竹原茂氏(麗澤大学名誉教授/旧名:ウドム・ラタナヴォン)の名を冠した「竹原基金」を創設しました。現在、この基金によって、貧困等の理由で学校へ通えないアジアの多くの子供たちへの教育支援を進め、留学生の招聘事業にも役立てられています。

平成20(2008)年4月には、それまで28年間にわたって国際救援活動に取り組んできたMIRC(モラロジー国際救援運動推進委員会)の事業を統合し、国際協力活動のいっそうの活性化に努めるとともに、MIRCが校舎を建設したカンボジアでの小学校(2校)への支援も引き続き進めております。

また、「アジアの子供たちへの教育支援」を目的に、これまでにチャリティーコンサートを3回開催しました。第1回は平成20(2008)年9月に千葉県市川市の行徳文化ホールで、第2回(2011年12月)と第3回(2014年12月)は、いずれも東京都の千代田区立内幸町ホールにおいて開催しました。各回とも多くの方々にご参加いただき、当協会の国際協力活動について深くご理解いただくとともに、多くのご支援をいただ

きました。本公演の収益金は、タイ、ラオス、カンボジア等、アジアの子供たちへの教育支援に活用させていただきました。

現在は、引き続いてタイ北部の少数民族の子供たちへの教育支援、ラオスやカンボジアにおける学校建設等への支援、ネパールにおける医療支援、海外での自然災害に対する緊急支援等を行っています。また、アジアの子供たちへの教育支援の一環として、平成26(2014)年度からはアジアからの留学生招聘事業も行い、これまでにラオス、ネパールから招聘した6人の留学生が麗澤大学で学びました。

さらに、わが国の青少年の育成に資するべく、長年にわたってタイ、ラオス等へのスタディツアーを定期的に実施しています。これらのツアーに参加した学生・生徒・青年は、訪問国の人たちとの交流や現地での生活体験を通して国際協力についての理解を深め、国際貢献の場で活躍するための知識と心を大きく育んでいます。

このように、ささやかではありますが、「世界の平和、人類の安心と幸福の増進」に寄与するために、これまでの経験と実績を踏まえて若い世代の育成にも貢献し、心の通い合う国際協力をいっそう推進していきたいと念願しております。

今日、先進各国と開発途上国との経済格差はますます広がってきております。麗澤海外開発協会の50年史の刊行を機に、あらためて当協会の使命を確認し、さらなる発展に向けて努力してまいります。今後とも、関係各位ならびにご支援を賜りました皆様によりいっそうのご指導とご鞭撻をお願い申し上げ、刊行の言葉といたします。



財団(麗澤海外開発協会)設立のねらい



麗澤海外開発協会
初代会長

廣池 千太郎

廣池千太郎 (ひろいけ・せんたろう)

(1922～1989)

財団法人モラロジー研究所(現・公益財団法人モラロジー道德教育財団)第2代所長・廣池千英の長男として東京に生まれる。九州帝国大学法文学部文科学科(教育学専攻)を卒業後、東京大学大学院文学部教育学科修了。財団法人モラロジー研究所第3代所長、学校法人廣池学園理事長、麗澤大学学長、麗澤高等学校校長、麗澤瑞浪高等学校校長、財団法人麗澤海外開発協会会長等を歴任。

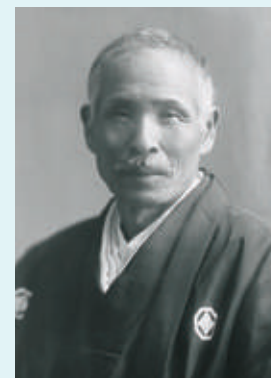
世界は今や原子力時代に入り、人類社会はますます発展の途上にあります。ところが、やがて21世紀を迎えようとする時にあたって、その繁栄の裏に幾多の深刻な問題が生じてきていることは、識者の等しく憂うところであります。

ことに、世界的な富の不均衡と偏在する過剰人口は、解決困難な諸問題を惹起^{じゃっき}しつつあり、とりわけ開発途上国においては、それが国民経済を圧迫し、貧困をもたらす大きな要因となっております。

こうした中において、私どもは、つとに世界人類の安心、平和、幸福を念願して、モラロジー(道德科学)を創建し、全世界に向かって精神的改革を呼びかけた学祖廣池千九郎博士*の意志にもとづいて、財団法人モラロジー研究所ならびに学校法人廣池学園を設置し、モラロジーを根幹とする社会教育、学校教育を広く展開し、微力ながら今日まで、国家ならびに世界の平和をめざして努力してまいりました。

しかし今日、深刻な政治的・経済的諸問題と取り組む開発途上国の姿を見ると、今やそれらの諸国に対して愛の手を差し伸べることは、幸福と繁栄を享受しているわが国日本の果たすべき当然の義務というべきであります。

もちろん、これら諸国の真の復興は決し



*廣池 千九郎 (ひろいけ・ちくろう)

1866～1938

大分県中津市に生まれる。青年期に教育者として初等教育の普及に取り組み、未就学児童のための夜間学校の開設や、道德教育の充実を目的とした『新編小学修身用書』の発行、日本初の教員互助会の設立などにも尽力。さらに地方史の先駆けとなる『中津歴史』を執筆、のちに『古事類苑』(日本最大の百科史料事典)の編纂に携わる(全体の4分の1以上を担当)とともに、『東洋法制史』という新しい学問分野を開拓、大正元年に独学で法学博士号を取得した。さらに、人間性・道德性の科学的・実証的な研究を深め、大正15年に『道德科学の論文』を完成させ、総合人間学モラロジーを創建。昭和の初め頃より「三方よし」の教えを説く。昭和10年、千葉県柏市に道德科学専攻塾を開設し、モラロジーに基づく社会教育と学校教育を共に行う生涯教育をスタートさせた。現在、社会教育は公益財団法人モラロジー道德教育財団、学校教育は麗澤各校(大学・高校・中学・幼稚園)を有する学校法人廣池学園へと受け継がれている。

て一朝にしてなりうるものではなく、また物量の多少によってもたらされるものではありません。それは、真の人類愛の精神を体得した人々の献身的努力によるのみ可能であると確信しております。

私どもは、そういう考え方を基本にして、本来の目的である精神の改革とともに、さらに具体的な救済策をもって、これらの開発途上国同朋の向上に尽力することを決意したのであります。そこで、私どもが最初に手がけたのが、ラオス王国ビエンチャンの農場建設であります。これは、昭和39年頃から現地調査ならびに農場視察をすすめるかたわら、逐次、数名の技術指導員と資材を送って、ラオス人カンバイ・ピラパンデ氏の所有する農場(100ヘクタール)の桑園造成に着手、以来今日まで、精神面・技術面において着実に実績をあげ、現地の人はもとよりわが国の政財界の各位からも賞賛を受けるに至りました。

ことに、前海外経済協力基金総裁・柳田誠二郎氏、アジア会館会長・岩田喜雄氏などは、その成果を高く評価され、財団設立の必要性を提起されました。

また国立教育研究所所長・平塚益徳氏も現地農場を訪問され、この種の努力こそ実物教育として開発途上国を自力で立ち上がらせる原動力である、と報告されています。

こうした各界の方々の理解あるご助言・ご協力によって、私どもはこの事業をさらに一段と強力に推進することこそ両法人の目的である世界平和と人類の幸福実現への道であるとの確信を得るとともに、今後は、組織的・計画的な施策にもとづいて、特に開発途上国の産業の開発に寄与すべく、ここに財団(麗澤海外開発協会)を設立するに至った次第であります。

なにとぞ、心ある識者におかれましては、私どもの真意をご賢察くださいます、今後とも絶大なご協力を賜りますよう、厚くお願い申し上げます。(1971年記)

これまでの実績を踏まえ、心の通い合う国際協力を推進する ——麗澤海外開発協会創立50年を迎えて	廣池 幹堂	2
財団（麗澤海外開発協会）設立のねらい	廣池千太郎	6

麗澤海外開発協会 活動の歩み

序章 財団設立までの経過 9

● 教育の視点に立った国際協力に携わる 竹原 茂 11

第1章 ラオスにおける支援事業 14

[1] 事業の目的	15
[2] 事業の概要	15
[3] 事業の経過	16
[4] 事業の成果	19
[5] ラオス教育支援事業	21
● 開発途上国に愛の手を差し伸べよう	淡島 成高 24

第2章 コスタリカにおける支援事業 33

[1] 事業の目的	34
[2] 事業の概要	34
[3] 事業の経過	35
[4] 事業の成果	41

第3章 ネパールにおける支援事業 42

[1] 「ティテパティよもぎの会」への支援	43
[2] もぐさ工場兼クリニック、無料巡回治療への支援	48
[3] ネパール大地震からの復興への支援	54

第4章 タイとカンボジアにおける支援事業 58

1 タイにおける支援事業	58
[1] メーコック財団への支援	59
[2] バンコク・スラムへの支援	61
[3] タイ・スタディツアーを定期的に行う	63
2 カンボジアにおける支援事業	67

第5章 未来を拓く継承と発展 70

[1] MIRC（モラロジー国際救援運動推進委員会）の事業を統合	70
[2] アジアの子供たちへの教育支援をめざしたチャリティーコンサート	72
[3] アジアからの留学生を招聘	75

一般財団法人 麗澤海外開発協会 定款	81
麗澤海外開発協会 活動年譜	87
一般財団法人 麗澤海外開発協会 歴代役員一覧	95

麗澤海外開発協会 活動の歩み

1971（昭和46）年に外務省所管の財団法人としてスタートした麗澤海外開発協会（RODA）の活動は、2008（平成20）年にMIRC（モラロジー国際救援運動推進委員会）を統合し、2013（平成25）年4月には内閣府より一般財団法人として認可され、2021（令和3）年に満50年を迎えました。今日まで、ラオスにおける養蚕開発事業、コスタリカにおける花卉栽培試験事業、また

ネパールで活動するNGO団体「ティテパティよもぎの会」への医療支援、タイ北部のメーコック・ファーム（現・メーコック財団）への支援、ラオスとカンボジアにおける学校建設等への支援、海外での自然災害に対する緊急支援、青年・学生・生徒たちを対象にしたタイ、ラオス等におけるスタディツアーなど、開発途上国を中心にさまざまな事業を行い、国際社会への貢献活動に取り組んできました。

また、2003（平成15）年には当時の当協会（のちに副会長）竹原茂（旧名：ウドム・ラタナヴォン／ラオス出身）の名を冠した「竹原基金」を設け、貧困等の理由で学校へ通えないアジアの多くの子供たちへの教育支援を進めています。

急速な発展を遂げる人類社会の繁栄の裏には、まだ多くの貧困と政治不安に苦悩する開発途上国の姿があることを、私どもは見逃すことができません。こうした深刻な諸問題に取り組んでいる開発途上国に対して、わが国として、また世界の平和、人類の幸福の理想に邁進する当協会として、その文化・経済面の発展に協力の手を差し伸べることは、当然果たすべき義務というべきでしょう。

当協会は、それぞれの時代、それぞれの国の様相とどう関わってきたでしょうか。今、これまでの50年間を振り返ります。

序章 財団設立までの経過（1964～1971.3）

麗澤海外開発協会は、1971（昭和46）年3月16日に外務省所管の財団法人として設立されました。総合人間学モラロジーの創建者・廣池千九郎（法学博士・1866～1938）の遺志に基づき、「開発途上国において文化・経済の発展に協力するため、国際協力活動を通じて、世界の平和、人類の安心と幸福の増進に寄与する」という目的に基

づいたこの活動は、すでに1964年、ラオス王国の首都ビエンチャンにその一石を投じており、その数年来における活動が現地の人たちはもとより、わが国の政財界からも称讃を受けておりました。そこで、さらに組織的・計画的な施策に基づいた現地における技術指導などの産業面の協力はもちろん、生活態度、思想などの精神生活面においても、目的達成に努力するために財団発足の運びとなったのです。

ラオスでの調査は、麗澤大学の奥平定世教授（1902～1984、財団設立時の常務理事）によって1959年に始まりました。奥平教授は、以後、毎年ラオス各地を踏査し、1964年の初めにラオスの首都ビエンチャンの商工会議所会頭カンバイ・ピラパンデ氏から農業開発指導の要請を受け、レイタク・カンバイ農場を指導開発する話し合いが両氏のもとで成立しました。同年6月、廣池千太郎、長谷虎治の両氏が奥平教授とともに現地を視察、同年秋に廣池学園から2名が現地に派遣されました。

当時、財団はまだ成立せず、有志の浄財によって桑苗の栽培や試験的養蚕活動が始まり、また農機具、肥料、種等の物資支援も始まりました。この業績は高く評価され、1968年に廣池学園の廣池千英理事長*（当時）は財団設立の意志を発表、有力出力、有財出財、人心の開発と救済への積極的方法が示されました。しかしその年の8月、廣池千英理事長は急逝され、ラオス開発は理事長の遺訓として残されたのです。この協会は、廣池千英理事長の一つの大きな遺産ともいえるでしょう。



*廣池 千英（ひろいけ・ちぶさ）

1893～1968

モラロジーの創建者・廣池千九郎の長男として京都に生まれる。東京帝国大学法科大学政治学科を卒業後、富士瓦斯紡績株式会社、財団法人協調会参事を経て、財団法人道德科学研究所（現・公益財団法人モラロジー道德教育財団）第2代所長、学校法人廣池学園理事長、麗澤大学学長、麗澤高等学校校長、麗澤瑞浪高等学校校長等を歴任。



東京・帝国ホテルで開催された麗澤海外開発協会の設立披露パーティー（1971年5月24日）。挨拶されるのはチャオ・ニット・ノーカム駐日ラオス大使（右）

教育の視点に立った 国際協力に携わる ——元ラオス王国への協力を契機として



麗澤海外開発協会前副会長
麗澤大学名誉教授

竹原 茂

（旧名：ウドム・ラタナヴォン）

竹原 茂（たけはら・しげる）

1943年、ラオスに生まれる。1965年、文部省（当時）の国費留学生として来日。東京外国語大学を経て一橋大学経済学部を卒業し、ラオス政府経済計画省計画課長を務める。74年、再度来日して一橋大学大学院に入学。75年、ラオスでの共産党政権樹立によって帰国を断念して日本に亡命。以後、精力的に難民救済運動、国籍法改正運動、タイのメーコック・ファーム（現・メーコック財団）の設立・支援活動等に携わる。麗澤大学教授、麗澤海外開発協会理事・副会長等を歴任。現在、麗澤大学名誉教授。著書に『ラオス概説』（共著・めこん社）、『ラオス・日本、アジアに生きる——異文化理解と国際協力の理想を求めて』（麗澤大学出版会）等がある。

私と麗澤海外開発協会（RODA／Reitaku Overseas Development Association）との出会いは、1967年11月、ビエンチャン商工会議所会頭のカンバイ・ピラパンデ氏と道德科学研究所（現・モラロジー道德教育財団）の廣池千太郎次長（当時）との対談の通訳がきっかけでした。当時の私は一橋大学経済学部3年生（開発途上国の経済開発専攻）でした。その前に私は、六本木のラオス大使館でラオス王国チャオ・ニット・ノーカム駐日大使と麗澤大学の奥平定世教授にお会いし、廣池千太郎先生とカンバイ氏との対談の流れについて打ち合わせをしました。その後は毎月、廣池学園等で奥平教授や協会設立メンバーと会うようになりました。

1971年4月から、私は麗澤海外開発協会の嘱託としてお世話になりました。主に「レイタク・カンバイ農場」事業計画資料等の翻訳や、ラオス政府関係者、廣池学園への訪問者に通訳をすることなどが業務でした。最も緊張したのは、同年5月24日の協会設立披露における廣池千太郎先生とチャオ・ニット・ノーカム駐日大使のご挨拶の通訳でした。このときの祝賀パーティーでは、日本の友人・柏原哲也氏のご協力で、在日

タイ留学生とフィリピン留学生による民族舞踊が披露され、会の雰囲気が盛り上がりました。

その他、貴賓館におけるチャオ・ニット・ノーカム駐日大使ご夫妻の歓迎レセプションや、サイヤーシット経済計画大臣とチャオ・カムヒン駐日大使（元国王の弟）の友好訪問歓迎レセプションにも準備と通訳をしました。その場で大臣が「今、ラオス政府ではウドムさんのような人材が必要です。ぜひラオスへ戻ってほしい」とおっしゃったため、廣池千太郎先生をはじめ協会役員の皆様から「今、国家が君を必要としているときだ。ラオスに帰ったほうがいいと思う」とのお言葉をいただきました。そして1972年11月、妻と子供を連れてラオスに帰国し、経済計画省に計画課長として入省しました。帰国した後も協会の囑託のままでお手伝いをさせていただきました。

1973年2月21日、ラオス王国政府とベトナム・中国・ソ連がバックアップしたラオス共産党との「ラオス和平協定」がビエンチャンで調印され、1974年4月に第3次連合政府が成立しました。そして同年10月6日、私は、日本の文部省の奨学生（第2回目）として一橋大学大学院経済学研究科修士課程に入学するために来日。廣池千太郎先生をはじめ協会役員の皆様のご理解を得て、廣池学園内の住宅に入れていただき、そこから国立市の一橋大学に通いました。奨学金だけで5人家族を養えず、協会の仕事を手伝いながら一部の生活費を援助していただきました。

1975年12月2日、ラオス共産党がラオス全土を制圧して王制を廃止し、ラオスは人民民主共和国（共産主義国）へと移行しました。その政変により、1976年3月、一橋大学大学院経済学研究科修士課程を修了した私は、ラオスへの帰国を断念し、そのまま日本に亡命（政治難民となる）し、1984年4月まで、協会の囑託としてお世話になりました。その間、日本の青年海外協力隊事務局と外務省研修所でラオス語とフランス語講師をするかわら、日本の国籍法改正運動に参加・協力し、インドシナ3国（ラオス、カンボジア、ベトナム）の難民救援運動等に協力し、主に①難民を助ける会（AAR）設立参加発起人、②アジア連帯委員会（CSA）設立参加発起人（常任理事）、③モラロジー国際救援運動推進委員会（MIRC）設立の呼びかけ、④在日ラオス協会設立（会長）に努めました。

1985年の夏には、日本の外務省と日本アフリカ協会の派遣でセネガル、アイボリーコースト（コートジボワール）、マリ、ニジェール、エチオピア、ジブチの6か国とフランス、英国を訪れ、1991年には、タイ北部チェンライ県での恵まれない少数民族の救援活動をするために、現地タイ人のピパット・チャイスリン氏と聖学院高等学校教員とともにメーコック・ファーム（現・メーコック財団）を設立しました。その後、1992年にMIRCの支援によって、同プロジェクトのインターナショナルハウスを建設しました。現在、同財団には麗澤海外開発協会からの支援も行われています。

また2003年からは、麗澤海外開発協会内に私の名を冠した「竹原基金」が設けられ、東南アジア諸国で貧困等の理由で学校へ行けない多くの子供たちのための教育助成事業も推進しています。東南アジアには、小学校を卒業しても、貧しいために中学校へ進学できない子供たちが大勢います。この基金の目的は、タイやラオス、カンボジアなど東南アジアの貧しい子供たちや少数民族の子供たちの教育を支援することにあり、その一環として留学生の招聘事業も進めています。

以上のように、麗澤海外開発協会は、ラオスから始まり、コスタリカ、タイ、ネパールなど開発途上国国民の生活向上のための援助に努力してきました。今、廣池幹堂会長のもと、このような国際協力活動のみならず、麗澤大学の卒業生やモラロジー関係の青年による開発途上国への協力、国際社会に貢献する若い世代の育成、ボランティアと交流活動への支援にもいっそう力を入れてきています。

これまでの麗澤海外開発協会に対する多くの方々のご支援・ご協力に深く感謝するとともに、今後の国際社会において協会の皆様がますますご活躍されるよう大いに期待しております。

第1章 ラオスにおける支援事業

南北1,000キロに伸びる細長い国 ——ラオス人民民主共和国

ラオス人民民主共和国は、インドシナ半島の最奥にある内陸国で、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーおよび中国と国境を接し、南北1,000キロに伸びる細長い国です。

《現在のラオス事情》(2021年7月現在)

●ラオス人民民主共和国

1. 面積：24万km²
2. 人口：約710万人(2019年、ラオス計画投資省)
3. 首都：ビエンチャン
4. 民族：ラオ族(全人口の約半数以上)を含む計50民族
5. 言語：ラオス語
6. 宗教：仏教
7. 政体：人民民主共和制
8. 通貨：キープ(Kip)
9. 産業：サービス業(GDPの約42%)、農業(約15%)、工業(約32%)、製品及び輸入に係る税(約11%)(2019年、ラオス計画投資省)
10. GDP(名目)：164兆170億キープ(約189億米ドル)(2019年、ラオス計画投資省)
11. 一人あたりGDP：2,654ドル(2019年、ラオス計画投資省)
12. 主要貿易品目：(1) 輸出：電力、金、金鉱石(2020年ラオス商工業省)
(2) 輸入：機械類、ディーゼル、車両(2020年ラオス商工業省)
13. 主要貿易相手国：タイ、中国、ベトナム他(2020年ラオス商工業省)
14. 主要援助国(機関)：
 - (1) ADB(アジア開発銀行)
 - (2) 日本
 - (3) IDA(国際開発協会)
 - (4) 韓国
 - (5) 米国
 (2019年、OECD(経済協力開発機構)/DAC(開発援助委員会))
15. 在留邦人数：833人
(2020年10月現在、海外在留邦人数調査統計)
16. 在日ラオス人数：2,917人(2020年6月、入管発表)



《当時のラオス事情》

●ラオス王国

1. 人口：192万人(1963年推計)
2. 首都：ビエンチャン 王都：ルアンプラバン
3. 政体：立憲君主制
4. 主要援助国：(1965年) アメリカ



カンバイ農場への道路

〔1〕 事業の目的

1. 機械力の導入による管理作業の近代化
2. 灌漑による養蚕年中飼育の実現
3. 施肥・消毒の徹底による収繭量の安定化
4. 蚕室の大型化による量産飼育の実現
5. 日本種(乾季)による収繭量の増大

〔2〕 事業の概要

〈1970年度事業内容〉

1. 養蚕(1970年5月27日から6月18日まで)
 - ・日本種、在来種、交雑種の3種類の試験飼育を3期間に分けて実施。
 - ・試験飼育の段階のため、事業として大量飼育をするに至らず。
2. 森林伐採
 - ・8ha(80,000mi)の森林の伐採と開墾。
3. 養蚕技術指導員の派遣
 - ・養蚕技術派遣員として青木丈幸と今井収をラオスへ派遣。

〈1971年度事業内容〉

1. 桑園造成(13ha)
 - ・新桑園1.5haにケオ種を植え付ける。
 - ・4ha分13,000本の桑苗を育てる。
 - ・ラオス避難民に桑苗2,000本を提供。
2. 養蚕
 - ・日本種3箱の飼育を2回実施、収繭量63kg
 - ・日本種×在来種3箱の飼育を実施、収繭量55kg

〈1972年度事業内容〉

1. 桑園 3ha分7,500本の桑苗を植える。
2. 養蚕 飼育回数 8回
収繭量 400kg
3. 建築計画
 - ・蚕室、堆肥舎、消毒用プール、給水塔の建築

〈1973年度事業内容〉

1. 園芸技術者の派遣
 - ・清水芳洋が青年海外協力隊園芸担当派遣員としてラオスに着任する。



ラオス到着の次の日、日本から持参したコンフリー植え付けを行う(農場にて、1970年2月22日)



カンバイ農場における桑苗作り



建築された蚕室、給水塔(1972年)

レイタク・カンバイ模範農場
(約100ha)

〈1974年度事業内容〉

1. 畜産専門家の派遣
 - ・山口明が現地へ派遣される。
2. 養蚕 収繭量 300～500kg
3. 「レイタク・カンバイ模範農場計画案」「ラオス王国養蚕開発計画案」の構想

〈1975年度事業内容〉

1. 桑園 5haの桑園造成、3haに桑苗の植え付け実施。
2. 養蚕 飼育回数 7回
収繭量 611kg
3. 製糸技術派遣員の研修
 - ①青木丈幸が千葉県繭検定所や恵南産業株式会社において製糸技術研修を行う。
 - ②松本哲弘が海外子女教育振興財団よりビエンチャン日本人学校の教諭を委嘱され赴任する。

〈1976年度事業内容〉

1. 事業の撤収
 - ①派遣員が帰国する。
 - ②すべての施設や資材を現地に引き渡す。

〔3〕 事業の経過

① レイタク・カンバイ農場設立までの経過

蚕室の内部
(現地の蚕具を使っている)

麗澤大学中国語学科教授・奥平定世氏は、中国研究者として中国と東南アジアの言語と民族に関する研究のために、たびたび東南アジア各地を訪ね、その中でも特にラオスに興味を持ちました。そして1959年からラオスでの調査を開始、ラオスのビエンチャン市内で病院を開業されていた小川蔵太医師との出会いから、ビエンチャン商工会議所会頭のカンバイ・ピラパンデ氏を紹介されました。カンバイ氏はビエンチャン市内で農業機械の代理店や製材所、農場などを手広く経営されていて、ラオスの経済的独立を図るためには、これらの農場経営について日本の技術協力が必要なことを奥平氏に強く訴えました。

奥平氏はそれに応えるべく、帰国後、ラオスにおける開発援助の同志を募りました。それは1964年、当協会の設立前のことでした。そして、奥平氏の献身的な働きかけにより、ビエンチャン市内から北西25キロの地に、レイタク・カンバイ農場が設立されました。

② レイタク・カンバイ農場設立後の経過

1964年6月に、当時の財団法人道德科学研究所の廣池千太郎次長、同研究所の長谷虎治評議員が現地を視察し、同年11月、学校法人廣池学園から池田信輔氏と杉本滋氏がレイタク・カンバイ農場に派遣されました。当時、農場の総面積は約100ha、二筋の湿地帯を挟む丘陵地で、この湿地帯は近辺では珍しく、ラオスの年間の半年を占める乾季にも絶えず水が流れていました。開拓面積は13haで、そこにはパイナップルを主にしてココヤシ、マンゴー、ライチなどの熱帯果樹が植えられていました。近くの村落までは約3km離れたジャングルのそばに位置し、農場内には電気・ガス・水道・電話などのライフラインは全くありませんでした。

そのような環境の中で、池田氏と杉本氏は1968年までの4年間、約10名の現地スタッフとともに農場開拓に従事しました。まず湿地帯の一部に排水を行って野菜畑を造成し、各種野菜の栽培を試みました。中でも濃紫色の日本ナスは市場でも珍しがられ、栽培・販売ともに成功しました。農場内の2つの池では、鯉、雷魚、鯰などの養殖も行いました。

また、手付かずの丘陵地を開拓し、5haの桑園を造成しました。これにともない蚕室二棟を建築し、養蚕事業に着手しました。蚕室の建築にあたり、害虫の侵入を防ぐために周囲に水溝を巡らしたり、網を巡らしたりするなど、さまざまな工夫を取り入れ、従来の蚕室を大幅に改善しました。

もともとラオスでは、古くから養蚕業が行われていましたが、



現場を歩き道図計画を立てる



ジャングルの開墾



繭を座繰りする現地の女性

蚕の品種・品質ともに貧弱で、また製糸作業も座繰^{ざぐり}を使用した手作業で行われていました。この養蚕業の近代化は、カンバイ氏の要望課題の一つでもありました。また、現地の人々がより豊かな生活を送れることを目的として、将来的にこの養蚕業・製糸業を海外への輸出事業として発展できるよう、当開発事業の主軸として力を入れていくようになりました。

池田氏と杉本氏の派遣以降も、当協会の設立にともない、廣池学園・麗澤高校から若い人材がラオスへと派遣されました。1969年には、淡島成高氏が現地責任者としてレイタク・カンバイ農場に派遣されました。また同年、千葉県蚕業試験場における今井收氏と青木丈幸氏に対する養蚕業の研修が始まり、研修終了後の1970年に、両氏は海外開発要員として現地へ派遣されました。そして、1973年に清水芳洋氏が千葉県の農業試験場での研修終了後、園芸担当員として現地に派遣されました。その後、1974年に畜産専門家として山口明氏が現地へ派遣されました。このように、

レイタク・カンバイ農場での開発事業の進展にともない、池田氏と杉本氏が着手した養蚕事業はさらに拡大されていきました。また、新しい蚕室の建設、堆肥舎、消毒用プール、給水塔などが建設され、農場内の設備も整ってきました。

栽桑事業は今井氏が担当し、当初13haある農場で1haしかなかった桑畑を4haまでに拡大し、そこで桑苗の栽培が行われました。1haあたりの桑畑には約2,500本の桑苗が植えられ、収桑量は約10tになりました。農場が湿地帯に位置していたこともあり、適度な水分が確保できたことと、腐葉土が多くあったため、桑苗栽培の事業は成功しました。

養蚕事業は青木氏が担当し、蚕種の品質改良が行われました。1箱に約18,000頭の蚕を飼育、1箱から約20kgの収繭量を目標とし、ラオスの在来種・日本種・2種の交配種など、さまざまな蚕種を使用した試験的な養蚕事業が行われました。養蚕事業の成功にともない、乾繭技術・製糸技術を学ぶために、青木氏は日本国内でさまざまな技術研修を受け、ラオスへ日本の優れた技術を導入しました。



桑園の造成をする今井收氏

園芸事業は、清水氏を中心に行われました。ラオスの農業人口は全人口の85%で、食糧自給率は50%という状態でした。残りの50%はタイなどからの輸入品でまかっていた。乾季と雨季という気候から、野菜を栽培できる時期は年間の約半分で、品質もタイのものより劣っていました。これらの問題を解決するために、米をはじめとしてさまざまな野菜の試験栽培が行われました。また、山口氏は養蚕事業一般から堆肥作り、土地改良などの事業を担当しました。



湿地を利用した桑苗床
(乾季に育繭し雨季に植え付け)

3 ラオスにおける事業の中止

当時のラオスは王制で、アメリカから援助を受ける自由主義国家でした。しかし、1972年頃からパテト・ラオ(ラオス愛国戦線)の勢力が強くなり、1975年にラオスの王制が廃止され、人民民主共和国が樹立されました。自由主義国家から社会主義国家へと変わり、ラオス政府が西側諸国からの援助を拒否し、経済にも勢いがなくなり、治安も不安定になっていきました。レイタク・カンバイ農場の現地スタッフの中からもラオス政府に徴兵される人がありました。また、ガソリン、食料品、日用品などが不足し、外出禁止令が発令されるなど、現地での活動が制限されることになりました。

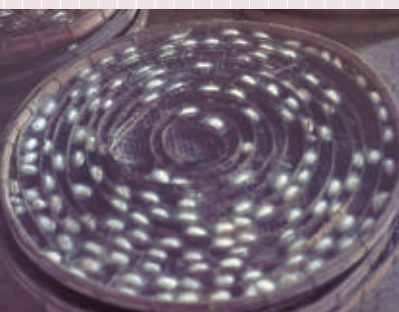
こうしたラオス国内の情勢悪化にともない、ラオス国内の状況を当協会に説明するため、派遣員が相次いで帰国。1976年に開催された当協会の理事会・評議員会で、ラオスでの養蚕事業の完全撤収が決定されました。レイタク・カンバイ農場の管理・運営をすべてカンバイ氏に引き渡し、事業撤収業務を終了した青木氏が1977年に帰国し、ラオスでの養蚕事業は中止されました。

〔4〕 事業の成果

事業を中止するまでの間、淡島氏をはじめ、今井氏、青木氏、清水氏、山口氏は、ラオス国の発展とラオスの人々の幸福を願



日本の回転簇（まぶし）



竹で編んだ現地の簇（まぶし）



完成したタート・インハン小学校の新校舎

い、20代の数年間をラオス国での活動に献身し、森林伐採、桑園の造園、養蚕、園芸、畜産など、さまざまな農業開発を行いました。ライフラインのない不便な現地で、すべての作業が派遣員、現地スタッフの肉体労働によって行われました。現地の若いスタッフとともに、作業を行っていく過程には、言葉、習慣、文化の違いから多くの障害がありました。しかし、互いに協力し合って困苦・欠乏を乗り越えた彼らの間には、50年経った現在も薄れることのない強い絆があることでしょう。

ラオスでの事業は、その事業の撤退後、ラオス国内において、これらの活動の成果が目に見えて引き継がれたとは言い難いものでした。しかし、農場開設やダム建設等、明らかな成果の残るものだけが開発援助なののでしょうか。協会の設立にあたり、なぜラオスに農場を開設するのかという問いに、奥平定世氏は次のように答えています。

「ラオスに農場を開くというのは、単に農業をやってどうしよう、というような目的ではないのです。それは、われわれ日本人が本当の愛情をもって、開発途上国家であるラオスの人心を開発しなければいけないというような意味合いから考えておったのです。日本から若い人が行ってラオスを研究する。そしてラオス人と親しくなっていくと同時に、日本を正しく理解してもらい、彼らを精神的にも物質的にも豊かにしてあげる。こういうふうにしていくことが、ラオスの政治・経済の面においてもよい結果が望めるのではないかと私は考えておるわけです。これは日本のため、またアジアのため、さらに世界人類のためであろうと思います」

21世紀の今、開発途上国に対する援助は、建設事業を中心としたハード面から人材育成などのソフト面へと、その形態が移行されてきています。当協会は50年前に、すでにこのようなソフト面の援助を目標とし、多くの若い人材を現地に派遣してきました。そして、現地で働く青年たちのほとばしる至誠と情熱がラオスでの事業の推進力となり、ラオスでの開発事業が現地に残した成果だったと言えるでしょう。「ラオスの土になる」と開発途上国での仕事に情熱を傾けた青年たち、彼らの強い熱意に賛同して心のこもった支援をくださった有志の皆様、純真で素朴な現地の人々、そしてさまざまな場面で形成されていった

ネットワークは、今日の協会活動のあらゆる基盤になったといえます。

〔5〕 ラオス教育支援事業

① タート・インハン小学校の校舎を再建

麗澤海外開発協会は、ラオス南部サワンナケート県のタート・インハン小学校から「老朽化した小学校校舎を再建したい」との要請を受け、資金等における協力・支援を始め、2007（平成19）年12月よりSVA（社団法人シャンティ国際ボランティア会）とも協力して、新校舎の建設工事に着手しました。

2008年2月に行われたタイとラオスのスタディツアーで訪問したときには、旧校舎が取り壊され、新校舎の下地部分ができた状態で、それまで雨風が吹き込み、電気のない校舎で学んでいた小学生たちは、新校舎建設を非常に楽しみにしていました。

新校舎の建設にあたっては、事前に校長、村長、教育省の役人が十分に話し合いの場をもち、建設中の建材の管理なども村人の協力を得て進められました。タート・インハン村は教育への関心が高い地域であり、校長をはじめ村人の期待も大きく、児童も勉強への強い意欲を持っていました。しかしながら、現金収入が少ない村人の生活では、教育にかかる負担が大きく、加えて政府からの教科書配付が1994年以降に止まっているなど、老朽化して倒壊の危険がある校舎の再建以外にも教育環境を改善していく必要がありました。そこで、新校舎を建設した後は、校舎管理やスタッフ育成を進めるなど、ソフト面でもフォローアップしていくことになりました。

タート・インハン小学校の新校舎贈呈式は、2008年8月20日に挙行され、麗澤海外開発協会から木下廣太郎常務理事、廣池英行理事、渡辺朋子事務局員、そしてスタディツアーに参加していた麗澤大学



新校舎前にてテープカット



小学校校長より感謝状の贈呈



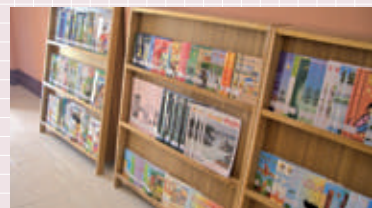
新校舎の贈呈セレモニー



ラオスの伝統の儀式で参加者の幸福を願う（パーシー）



新校舎での授業風景

完成したタート・インハン小学校の
図書館

図書館の内部

の学生も参列しました。

式典には、校舎建設に協力いただいたSVAのラオス事務所長、スタッフのほか、ラオスの官公庁関係者、教育関係者、住民、児童等、200名以上が参列し、村の教育の発展に対する大きな期待と熱意が感じられた式典となりました。また新校舎の教室には、新しい黒板、机、椅子が搬入され、9月から始まる新学期より使われるとあって、児童たちは大変楽しみにしている様子うかがえました。学校関係者や村人は、感謝や喜びの言葉とともに「より良い教育を行い、子供たちには将来のラオスに役立つ人間になってほしい」という思いを幾度となく述べていました。

② タート・インハン小学校の図書館を建設

教育支援事業として進めていたラオス・サワンナケート県タート・インハン小学校の図書館が竣工しました。この図書館は、2008（平成20）年に竣工したタート・インハン小学校の校舎再建に続いて麗澤海外開発協会が教育支援事業として建設したものです。2011（平成23）年2月17日に同校で開催された図書館の贈

呈式には当協会の竹原茂副会長をはじめ、山中香事務局員、麗澤大学の学生が参列しました。

式典には、建設に協力いただいたIV-JAPANの富永幸子代表とスタッフのほか、ラオスの官公庁関係者、教育関係者、住民、児童等、200名以上のたくさんの方々方に参列いただき、村の教育の発展に対する大きな期待と熱意が感じられた式典となりました。図書館には200冊ほどの書籍が納められ、当協会からは日本の童話等の書籍も贈呈しました。ラオス教育局からは感謝状を頂き、麗澤大学IEC（外国語学部国際交流・国際協力専攻）の学生（グループRISOVP〈リソップ〉）からは手作りのプレートが贈呈されました。

この図書館は、開館の間は児童以外に村人も利用でき、図書館司書の研修を受けた小学校の教諭10名が交代で管理しています。今後はより多くの人々に活用していただき、さらにサワンナケート県と麗澤海外開発協会がよりいっそう交流できることが期待されています。



感謝状の贈呈



教育関係者と記念撮影

贈呈式参列者の感想

タート・インハン小学校の校舎贈呈式に参列しました

ラオスのタート・インハン小学校へ到着すると、校庭のテントには小学校の児童や多くの村人が集まっており、日本からの一行を花の首飾りで出迎えてくれました。

厳粛な中、式典が始まり、ラオス側の出席者からのスピーチに続き、麗澤海外開発協会から挨拶を行いました。記念品の交換に続き、新校舎の教室においてラオスの伝統儀式であるバーシーの儀式が執り行われました。村人や先生、児童一人ひとりに祈りの言葉とともに糸を手首に巻いてもらうという貴重な体験をしました。昼食会の料理も日本人に合わせて辛さを控えていただいたり、日が傾くとテントをずらしたりして、言葉以上の気持ちが伝わってきました。日本からの参加者たちは皆、ラオスの方たちのおもてなしに感激で胸がいっぱいになったようです。

後日、現地より「新しい教室で、風雨を心配することなく、安心して勉強している児童たち」の様子をとらえた写真が届きました。「勉強できることが楽しい！」——そういう子供たちの姿に、あらためて考えさせられる旅になりました。

贈呈式参列者の感想

タート・インハン小学校の図書館贈呈式に参列しました

タート・インハン小学校へ到着すると、児童たちは勢ぞろいで出迎えてくれ、校長、教員、官公庁関係者、保護者の方々が一堂に会して図書館贈呈式が執り行われました。最初に建設の報告があり、建設の担当したIV-JAPANの富永幸子代表より挨拶があり、続いて麗澤海外開発協会の竹原茂副会長から挨拶がありました。麗澤大学生からは、手作りの記念品贈呈とスピーチがありました。その後、図書館見学、記念植樹でジャックフルーツの苗を植え、ラオスの伝統儀式バーシーが行われました。

昼食会では、小学校の児童による歌の披露と音楽演奏などがあり、ラオス料理をタート・インハン村の皆さんが用意してくださり、これまでに食べたことのないおいしい味に日本からの参加者も感激した様子でした。

これからは、図書館を運営していくために課題や問題点などを教員や保護者が話し合い、より良い図書館になるよう協力していくことが合意されました。





開発途上国に 愛の手を差し伸べよう

—— ラオス産業の自立をめざして

あわしま なりたか
淡島 成高 (麗澤大学名誉教授)

1969年から5年間、ラオス駐在の責任者としてラオスに赴任した私は、現地駐在員ならではのかけがえのない貴重な体験をすることができました。

奥平定世教授の熱意に動かされて

1966年3月に麗澤大学中国語学科を卒業した私は、中国語を使う仕事がしたいという念願がかない、日中貿易の商社に入社しました。そこでは入社1年目から会社代表で中国に派遣されるなど、重要な仕事を任されていました。喜びのうちに、無我夢中で2度、3度と中国出張が続いていた2年目の頃のことです。恩師の奥平定世教授(麗澤海外開発協会設立時の常務理事)から「淡島くん、ラオスへ行ってみないか」と勧められました。

当時、中国は文化大革命の真っ只中で、対外的に門戸を閉ざしていた頃ですから、精神的には重苦しく、出張しても緊張の連続でした。また、現地では、つい昨日言葉を交わした大手ダミー商社の社員がスパイ容疑で捕まるなどといったニュースも流れていました。もっとも、そうしたことが退社を考える唯一の要因ではありませんでしたが、文化大革命の嵐は日本国内の業界にまで影響し、仕事以外に少々疑問を感じていた頃、ラオスの話が飛び込んできたのです。

麗澤海外開発協会の設立の原動力は、奥平教授の熱意そのものであったと思います。私は、学生時代に事あるごとに奥平教授からラオスの話を聞かされていたせいか、あまり抵抗がなく「行こうか」という気になりました。しかし当時はまだ協会の設立も実現していないし、私の現地での仕事内容も明確なものでもありませんでした。また、新しい仕事ですから、躊躇する気持ちもありましたが、開発途上国での仕事に情熱を傾けるのも

夢があっていいのではないかと、手探り状態ながら1969年8月、現地に向けて出発しました。

その一年前の1968年8月増刊号の『れいろう』の特集「海外に伸びる」の中に、平塚益徳氏(当時・国立教育研究所所長)がラオスを訪問されたことや、麗澤海外開発協会の設立準備の状況などが紹介されていました。その記事の中に大きく取り上げられていたのですが、私たちが派遣される前の池田信輔氏(その後、OTCA〈海外技術協力事業団〉の養蚕専門家としてラオスに赴任)と杉本滋氏(麗澤高校定時制卒業・麗高16期)のカンバイ農場での想像を絶する苦労があつてこそ、協会の設立に大きく動いたのではないかと思います。また、それを気長に物心両面でバックアップし支えてこられた内田武男氏(協会設立時の監事・モロジー研究所参与)などの心のこもった支援のお気持ちが、派遣された我々にも伝わってきたように思っています。

のどかな時の流れの中で

ラオスは現在、ラオス人民民主共和国(1975年～)という国名になっていますが、当時はラオス王国という名称で、ワッタナ国王を戴き、ラオス国民もこぞって尊敬の念を抱いていました。また、何よりも敬虔な仏教国(上座部仏教)で、争いごとを好まない柔らかな国民性を持っていました。しかし、内外の情勢はのどかな農業国をそのままにさせておかず、パテト・ラオ(ラオス愛国戦線)が活発に動き出すなど、隣国のベトナム戦争に大きく左右させられました。当初はアメリカの人的・物的支援に頼るところが大きく、経済的にもいくらか潤っていたのですが、戦争が拡大されるに従って北部からの難民が増えてきたり、夜間外出禁止令が出るなどの変化が出てきました。もっとも、市内では新聞で報道されるような緊迫した場面は全くと言っていいほどなく、あとで日本の新聞を見て、こんなことがあったのかと知る程度でした。

ラオスには当時、これといった産業がなく、大きな工場は唯一たばこ工場だけとされていました。タイ、カンボジア、ベ



カンバイ・ピラパンデ氏(左)と
奥平定世教授(右)



トラクターに乗る(1974年1月21日)

トナム、中国、ミャンマーに囲まれた日本の本州ほどの内陸国で、国全体の70%が山岳地帯であり、1年が雨季と乾季にはっきり分かれ、雨季にはよく水害に見舞われていました。平野部では水稻が、山間部では焼き畑による陸稲が主でしたが、実にのんびりした国民性でした。当時の農業援助を物語るものとして、ある国が稲作の技術援助をしたところ、例年より2倍の収穫があり、大いに満足したのですが、次の年に行ってみると、去年は倍取れたから今年は休んでいた、という話があったほどです。また、日本も専門家をはじめ青年海外協力隊を数十名派遣するなど、当時は世界で最も多くラオスに派遣していて、農業、産業技術、電信電話、医療、スポーツ、日本語など、あらゆる分野で専門技術を持った日本の若い人たちが活躍していました。我々は、政府援助事業として派遣された彼らとは立場が違いましたが、彼らとの交流を通して、お互いにラオスのために何か力になろうと刺激し合ったように思います。

私が赴任して1年目ぐらいに、市内に信号が付きました。当初は、四六時中お巡りさんが見張っていたのが思い出されます。

市内に初めて4、5階建てのホテルができたとき、エレベーターを見るために、弁当持ちで見学に来た人がいたということも聞きました。テレビはタイの放送を傍受していて、電話も主だったところにしかなく、直接行ったほうが早いという状況でした。日本からは時々電話連絡をするようにと指示がありましたが、どこで電話を借りようかと苦勞したものです。鉄道はありませんから、乗り合いタクシーか、市内は人力三輪車のサムローといわれるものが足代わりでした。しかし、こうした環境が

不便で苦痛だったという思い出はみじんもなく、のんびりとのどかに時が流れていったように思います。

日本人の駐在者も、大使館関係者、OTCAの専門家、青年海外協力隊をはじめ、民間ではナムグム・ダム建設（日本政府援助）の関係で間組、日本工営、それに商社は三井物産と東洋綿花の2社だけで、またアメリカ軍関係の任務に携わっていた数人の邦人でした。このように在留邦人全員と親しく知り合いになれ



人力三輪車のサムロー

るほどの少人数で、日本人会も中華料理屋さんの一室で一堂に会せるほどでした。中でもレイタクは5、6人いましたから、民間の一単位としては大所帯でした。

カンバイ農場での生活

当時、首都のビエンチャン市内から北方25キロ地点にレイタク・カンバイ模範農場がありました。市内を外れると、すぐに舗装道路は途切れて赤土の道が続き、乾季にはもうもうと土煙をあげ、雨季にはハンドルを取られるほどの道のりでした。農場の全面積は100haありましたが、私が行った当初は、農園らしいところは桑畑、パイナップル畑、養魚池など一部の地域だけでした。桑畑の近くには10坪ほどの蚕室があり、農場の中央部に2階建ての住居（1階は倉庫兼蚕飼育室）がありました。2階には水洗用便器はありましたが、電気、水道はありません。入り口部分に屋根からの雨水をためる水槽がありましたので、その水を利用したり、外の井戸からの水を運びあげたりして食用に使っていました。

裏手には労働者用の住居があり、本格的な農場生活が始まった頃からは、炊事・洗濯などを引き受けてくれる家族が住み、我々の世話をしてくれました。夜の明かりはアルコール・ランプで、日頃の手入れは大変でしたが、読み書きができる明るさでした。風呂はありませんから、池のほとりで体を洗っていました。水辺でパチャパチャやっていると、3、4センチもあるヒルがひょろひょろやってくるのですが、それをよけながら水をかぶっていました。また、乾季の冷える頃などは少々辛いアプナム（水浴び）となりました。

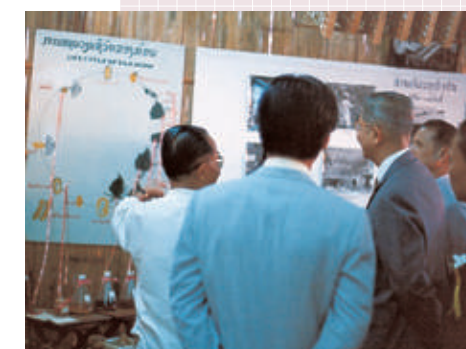
南国の風景に、水牛が子供を背に乗せてゆったりと歩く絵や写真を見かけますが、この水牛には手を焼いたり驚かされたりしました。農家ではたいい水牛を1、2頭飼っているのですが、雨季の稲が植わっているときはしっかりと繋



ナムグム・ダム



タートルアンの祭り。
ワッタナ・ラオス国王に絹糸を
献上するカンバイ氏の子供たち



ダルアン・ラオス万博で養蚕について
説明するカンバイ氏



気持ちよさそうに水浴びをする水牛

れているのですが、取り入れの終わった乾季には放し飼いになります。農場には周囲に柵が施してあるのですが、夜中にはどこからか侵入し、首に付けたカウベルをカランカランと鳴らしながら入ってきて、桑の葉を食べたり、桑の木に体をこすりつけたり、やりたい放題されるわけです。また、車に乗っていて道路で水牛にぶつかったことがあります、この時は向こうが一回転したものの、こちら

のラジエーターがやられてしまいました。ビエンチャン市内から農場までの25キロは、水牛が飛び出してきたり、鶏が飛び込んできたりして、ラオスならではの光景が随所に見られました。

地元の名士カンバイ氏

当初、農場には現地の人が一人いて、共同事業者のカンバイ氏の指示に従ってそこを管理していました。私もその人と一緒に、見よう見まねで養蚕を始めました。何しろ蚕については、千葉県の蚕業試験場で見たことはありましたが、自分で飼ってみるのは初めてのことでした。蚕が何回か脱皮をしたり眠りを繰り返したりすることなど知らないものですから、いくら桑をやっても食べないので不安になったこともありました。

カンバイ氏は、ビエンチャン商工会議所会頭という肩書きを持っていました。どのような事業が主であったかははっきりしませんが、商品の輸出入業務や製材工場、タイヤ工場が主業務だったのでしょうか、小さな宿泊施設も持っていたようです。

もちろん、繭が収穫できた時は、軒先でおかみさんや女性陣総出による糸ひきも行われていました。カンバイ氏の父上の逝去後、何年かして本葬がラオスの大僧正の読経で執り行われましたが、式にはプーマ首相も参列されていたので、ビエンチャンの名士だなあと実感しました。また、子供の結婚式では、自宅の庭にステージを設けるなど派手な演出もあり、実業家ぶりをうかがわせましたが、そんな場にはいつも大臣や



カンバイ氏夫妻

将軍、警察署長といった来賓が顔を見せていました。

毎年秋には王室の菩提寺であるタッラン寺の境内でラオス万博のような催しがあり、日本をはじめ各国が自国を紹介したりするパビリオンができていましたが、その中にはカンバイ氏のブースもあって、タイヤ工場や我々の養蚕・製糸コーナーも設けられました。そして、ある年にはワッタナ国王自らが参観に来てくださり一同大いに感激しましたが、これもカンバイ氏の実力があってこそその出来事でした。

その後、カンバイ家のご夫妻は亡くなりましたが、二男のケマサ氏が跡継ぎになってトヨタ自動車のディーラーになって活躍しています。

情熱を持って取り組んだ事業

私に続いて、千葉県の蚕業試験場で研修を積んだ青木丈幸氏と今井収氏の二人が派遣されてきました。彼らは実に精力的に現地の人たちとも溶け込み、終始前向きに仕事に取り組んでくれました。トラクターや蚕具などが揃ったこともあり、桑の苗木作りから桑園の拡張、積極的な飼育へと手掛けていきました。1972年には、1万1千USドル(330万円)をかけた、160坪の蚕室と堆肥舎、繭乾燥装置、井戸などが完成しました。

また、1973年には、^{そざい}蔬菜技術を持った清水芳洋氏(後に青年海外協力隊に転出)が派遣されてきました。また、1974年には畜産専門の山口明氏が赴任してきて、養蚕、蔬菜、畜産と農場運営のスタッフが揃ってきました。

一方、メインである養蚕については、繭の収穫量が今までの年間50～100キロそこそこだったのが、年数回の飼育で300キロ、500キロと順調に伸びていきました。

現地スタッフも充実し、「レイタク・カンバイ模範農場計画案」や「ラオス王国養蚕開発計画案」をたびたび作成しています。現農場を充実させ、それを核に一大養蚕団地を広げていこうという構想です。麗澤海外開発協会とラオス政府とでラオス蚕業開発委員会を組織し、その下に蚕業協同組合と養蚕普及所を設け、6年後には年間560箱の飼育、14トンの集繭量をめざすという壮大な構想でした。この背景には、北部からの難民が増えて



高床式家屋の中で機織り



4条の小型製糸機を使つての製糸作業

きたことや、日本政府も彼らの入植地を造成援助するなどの積極姿勢を見せていたこともありました。



地鎮祭で祝詞を奏上する淡島氏

そんな中で、日本国大使館の山下和夫参事官(帰任後、東宮侍従長)には何度となく農場にお越しいただきレイタクの事業展開をご理解いただくことができました。一方、私的な思い出ですが、私が一時帰国して結婚し再赴任する際、タイとラオスに水害が発生、バンコックで足止め

に遭う事態になりました。結果的には列車、トラック、渡し船、人力車と乗り継いでビエンチャンにたどり着きましたが、その際も、大使館

の玄関まで出迎えてくださるなど、忘れることができない温かなお心づかいを頂戴いたしました。しかし、その後1974年にラオス王国から連合政権樹立への政変が起こると、諸々の事情が重なり、我々に追い風が吹くことはありませんでした。今、手元に当時書いた手書きの計画書が何部が残っていますが、よくここまで綿密に書き上げられたものと、我ながら感心している次第です。ただ、結果的には実現しなかったわけですから、今にして思えば「カンバイ農場にのみ集中し、足元をもっと固めるべきだった」「政府援助に頼ろうとすべきではなかった」などの反省もありますが、当時としては最善の策を模索した結果だと思っています。

苦労の中で見いだした温かい出会い

ラオスでの事業の運営について、困難を感じたり苦労したりしたことは尽きませんが、今思い起こせば貴重な体験だったと、プラス面のほうが多かったように思います。

当初は、金銭面でやりくりには苦労しました。協会設立以前は送金方法がなく、何度か樋口幸夫氏(事務管理室経理担当、元廣池学園経理部長)と日銀に相談に行ったりしました。カンバイ氏との金銭的な面での共同運営についてもかなり苦労しました。取り決めでは折半になっていましたが、両者が資金を出し合っ



竹で編んだ現地式の飼育カゴに入れ、桑の葉を与える。もともと村で養蚕をし、糸を引いて機織りし、服にして着用(自給自足)

営のほとんどはレイタク・カンバイ農場から出し、ときどき繭の売り上げがカンバイ氏から入ってきていました。今から考えれば、両者の話し合いでもうもう少しうまく切り盛りすればよかったのですが、当時としては現場で肥料がある、ブルドーザーを入りたい、労働者が臨時で必要だといったタイムリーな仕事をこなしていくには仕方がなかったのかも知れません。

労働者を常時数人使うようになっていましたが、1人に月給5千キップから8千キップ(10~16ドル)、家事を切り盛りしてくれる家族には7千キップ(14ドル)支払っていました。なお、我々の給料は当初100ドル~200ドル、途中からは140ドル~240ドル(71年=@360円、72年=@300円、73年=@260円)に上げてもらいました。政府派遣の専門家や協力隊の人たちと比べると決して多くはありませんでしたが、みんな不満に感じることなく結構楽しくやっていました。

この頃のよい思い出といえば、現地でのさまざまな人との出会いです。最初に1人で赴任した当初は、カンバイ氏宅の1室で寝起きしていました。食事時になると「シマー(アワシマ)、キンカオ(食事)」と子供たちが呼びに来てくれ、家族の人たちと一緒に食事をしていました。お金持ちの家ですから、おいしいものもありましたが、どうしても手につけられないものもありました。そのうち、気候に馴れないこともあってか、だんだん痩せていったので、日本人医師の勧めもあって、日本料理屋さんの月極定食を食べるようになりました。カンバイ氏の家での毎日の食事は辞退しましたが、その家族の温かい気持ちは今も忘れることができません。

また、ラオス経済計画省の計画課長としてウドム・ラタナヴォン氏(現・竹原茂麗澤大学名誉教授、麗澤海外開発協会前副会長)が日本留学から帰っていたので、よく役所へ訪ねて行きました。そ



カンバイ氏次男の結婚式パーシー



カンバイ氏長男の表敬訪問
廣池千太郎先生を囲んで(1982年)

の後の政変もあり、彼の立場は微妙なものとなり、再度日本に来ることになりましたが、国の体制如何によっては、麗澤海外開発協会のその後の展開も違ったものになっていたかも知れません。しかし、協会設立以前から日本とラオスで何かとパイプ役を果たしてもらった彼とは、今日までご縁が続いています。

ラオス産業の開花を願って

私は1969年から74年までに2度、一時帰国をしましたが、ラオス養蚕開発に微力ながら足かけ5年携わることができました。この間、「開発途上国において文化・経済の発展に協力する」という協会の設立趣意にどこまで忠実に実行できたか、今改めて振り返って自問自答してみると多くの反省材料が思い浮かびます。

廣池千太郎会長(当時)からは、「慌てても結果がすぐに出るようなものではないんだから、長い目でじっくり取り組みなさい」と激励をいただき出発したものの、少し結果を急ぎすぎたかも知れません。高度の農業技術を持ち合わせた人が必ずしも開発事業にふさわしいとは限りませんが、我々には、技術に裏打ちされた戦略に少し欠けていたかも知れません。

我々の活動がラオスの産業開発への導火線となって華々しく開花する、というのは大きすぎる夢でしたが、池田氏から始めて、それに続いた何人かの情熱と麗澤の物心両面から支えてくださった精神がラオスのどこかに生きていたとしたら、これ以上の喜びはありません。世界のニュースの中でもあまり報道されない小さな国ラオスですが、平和で、争いのない安定した国家になっていくことを願ってやみません。

ラオスの国花
ブルメリア



第2章 コスタリカにおける支援事業

豊かな海岸 ——コスタリカ共和国

地図を広げると、メキシコの南端から南米大陸に向けて、ちょうど象の鼻のように伸びた細長い陸地が続いています。この南北両アメリカ大陸をつなぐ回廊が、いわゆる中央アメリカ地峡です。コスタリカは、中央アメリカ南部に位置する共和制国家で、北はニカラグア、南東はパナマと国境を接しています。



《現在のコスタリカ事情》(2021年11月現在)

●コスタリカ共和国

- 面積：5万1,100km² (九州と四国を合わせた面積)
- 人口：約509万人 (2020年、世界銀行)
- 首都：サンホセ (標高1,200m)
- 民族：ヨーロッパ系及び先住民との混血が多数、中南米系 (ニカラグア系、コロンビア系、ベネズエラ系)、ジャマイカ系、先住民系、ユダヤ系、中国系
- 言語：スペイン語
- 宗教：カトリック (国教、ただし信教の自由あり)
- 政体：共和制
- 通貨：コロン (¢)
- 主要産業：農業 (バナナ、パイナップル、コーヒー等)、製造業 (医療器具)、観光業
- GDP (名目)：603億ドル (2020年、コスタリカ中央銀行)
- 一人あたりGDP：11,106ドル (2020年、コスタリカ中央銀行)
- 主要貿易品目：(1) 輸出：医療機器、バナナ、精密医療器材、パイナップル等
(2) 輸入：医薬品、衣類、石油製品、自動車、軽油等 (2020年、貿易振興機構)
- 主要貿易相手国：
(1) 輸出：米国、オランダ、グアテマラ、ベルギー、パナマ
(2) 輸入：米国、中国、メキシコ、グアテマラ、ドイツ、マレーシア、日本
(2020年、コスタリカ統計・国勢調査局)
- 主要援助国：
(1) 日本 (48.74) (2) ドイツ (11.66) (3) 米国 (10.53)
(4) フランス (4.38) (5) カナダ (1.09)
(2018年、支出総額、単位：百万ドル)
- 在留邦人数：351人 (2021年10月現在)
- 在日コスタリカ人数：206人 (2020年12月現在)



コスタリカ国花のラン



サンタアナ農場の入口から奥を見る

サンタアナ農場の入口にて（1986年）。
派遣スタッフの大野裕朗氏（右）
白木和彦氏（左）

サンタアナ農場に建てられた研究室

[1] 事業の目的

事業は、中米コスタリカ共和国の首都サンホセ州サンタアナ市に花卉園芸センターとして農場を建設し、カーネーションのウイルス・フリー苗（無菌苗）の培養と切花栽培および事業地域での適性品種を選定することを目的としました。また、この過程を通じてウイルス・フリー苗の育苗技術ならびに切花栽培の確立と同時に、その技術を周辺農民に普及し、コスタリカ共和国の花弁栽培技術の向上・発展と花卉産業の振興に寄与することを本事業の目的としていました。

当時、カーネーションは世界的にウイルスによる汚染が著しく、苗や切花の出荷にあたってウイルス・フリー苗が要求されていましたが、中南米においては、まだこの苗が作られていませんでした。事業開始3年を目途に、苗からの切花栽培を進め、それらの苗や切花を米国、中南米諸国、ヨーロッパへ輸出することを目標としました。また、事業の進展にともない、観葉植物や多種にわたる花を栽培、販売することを計画したり、技術援助としてコスタリカ人にこれらの技術を普及したりと、日本や米国で研修を行いながら、同国の経済開発の一助たらんことをめざしました。

[2] 事業の概要

1 サンタアナ第1農場

1978年、現地法人のレイタク・コスタリカ株式会社を設立し、翌年、サンホセ州サンタアナ市コンセプションに約3.3haの農場を建設し、次の事業を行いました。

- ① カーネーションのウイルス・フリー苗の培養と切花栽培。
- ② カーネーションの新品種をアメリカ、ヨーロッパか

ら導入。土壌試験、肥料試験、病害虫試験、温度、湿度などの適性品種を選定。

- ③ ①②を通じて現地に適合するウイルス・フリー苗の育苗技術ならびに切花栽培技術の確立を図る。
- ④ これらの技術を周辺農民に普及し、コスタリカの花弁栽培技術の向上・発展と、花卉産業の振興に寄与する。
- ⑤ 企業としての事業運営を図るとともに、コスタリカの花弁栽培の向上・発展と花卉産業の振興に寄与することを目的としたガーデンセンターの開園。

2 アラフェラ第3農場

1982年、湿地帯で花卉栽培に適さなかったエレディア州オルケタ地区サラピキ第2農場を売却、アラフェラ市ロブレ地区に第3農場を建設。事業計画の一部変更を国際協力事業団へ申請し、次の事業を行いました。

- ① コスタリカ原産の観葉植物の生産。
- ② アメリカ、オランダ、ドイツ、イタリアへの葉物輸出事業。
- ③ 日本へのドラセナ（幸福の木）コンテナ輸出事業。

[3] 事業の経過

1 レイタク・コスタリカ株式会社設立までの経過

1977年秋、当協会の藤村義朗理事が、米国サリナスの内田善一郎氏と三重県津市の赤塚充良氏から「中米コスタリカにおける協会の事業として、花の栽培が有望である」との報告を受けました。1978年、協会の理事会で協議の結果、これを検討することとなり、長谷虎治副会長、藤村義朗理

研究室ではカーネーションの無菌苗
の研究を行ったサンタアナ農場における母の日の売店
イベントの飾りつけ（1981年）サンタアナ農場では、植物栽培のほか
国内向け植物売店も営業していた



日本とアメリカからの来訪者を迎えて、
エル・ロブレ農場の事務所にて

事、岩坂喜一理事等による調査団が現地に派遣されました。

その後、数次にわたる調査の結果、廣池千太郎会長の許可を得て外務省や農林省に諮り、国際協力事業団による融資を受けて本事業を行うこととなりました。そして、国際協力事業団から官民合同によるコスタリカ花卉園芸基礎調査団が派遣され、細部にわたる調査が行われた結果、コスタリカにおける花卉栽培は非常に有望であるとの

調査報告が提出されました。

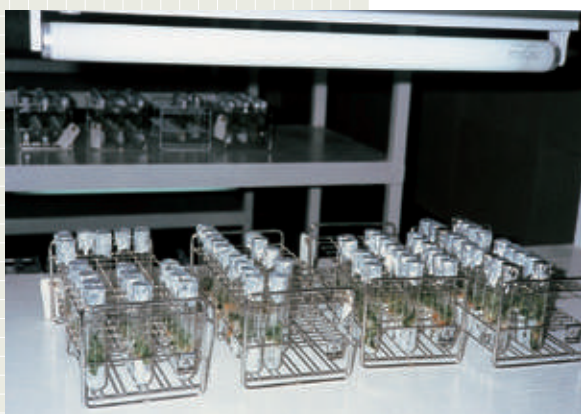
この調査報告を受けて、当協会では、コスタリカ共和国で農業、花卉栽培の技術援助を目的に、レイタク・コスタリカ株式会社を設立することに決定しました。社長には長谷虎治氏、副社長に藤村義朗氏と赤塚充良氏、専務に岩坂

喜一氏と内田善一郎氏が任命されました。資本金230万コロン(5,000万円相当)のうち140.3万コロン(3,000万円相当)を当協会が出資、残額は後援団体のモラロジー研究所維持員の有志者によって出資され、1978年9月5日に設立登記を完了しました。ここに当協会は、当時の寄付行為第4条(目的)に記載するように、人材の育成と技術指導を通じて世界の平和、人類の安心と幸福に寄

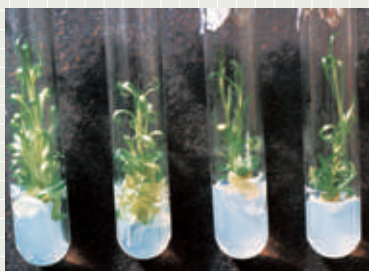
与することを目的として、道徳的指導も併せて行い、日本とコスタリカ両国の親善と繁栄に努力することとなりました。

2 花卉栽培事業の経過

現地法人のレイタク・コスタリカ株式会社設立後、サンタアナ市に3haの農場用地を購入して、国際協力事業団に「花卉栽培試験事業」の申請を行い、融資の承認を得て現地



カーネーションの無菌苗



カーネーションの無菌苗

法人の事業資金に充当してきました。1981年7月にレイタク・コスタリカ株式会社サンタアナ農場施設が完成し、事業を開始しました。当時、コスタリカと条件のよく似た隣国コロンビアではすでにカーネーションの栽培が始まっていた、世界最大の産地となっていました。年間を通じて無加温栽培が可能で、このカーネーションは日本へは年間100万本以上が空輸されていました。この数字から考えて、コスタリカにおける花卉産業は、将来その発展が大いに期待できると考えられました。また、これによる収益は、現地はもちろん、海外モラロジー開発の源泉になることも視野に入れ、日本や米国への輸出を目標に事業展開を進めました。

また、一方では、温室の一部におけるコスタリカ国内販売用の売店を整備するため、日本から輸入したサボテンやコスタリカ国内各所から仕入れた花卉園芸植物の栽培も開始し、7月25日に農場施設の完成と販売店のオープンを記念する開場式を行いました。式には日本からの役員、廣池英二郎氏ご夫妻、岩坂喜一氏、大野裕朗氏、永田定吉氏ご夫妻等を迎え、コスタリカ駐在の日本人や現地の著名人を招いてのセレモニーとなりました。

農場開場後も温室内の植物栽培を行い、さらに12月には隣接するアラフェラ市に9haの農場用地を購入して観葉植物の栽培も開始しました。この間、当協会からは用地購入資金を投じ、人材を派遣するとともに、国際協力事業団からは3年間にわたって毎年1名の専門家を派遣していただき、中心事業であるカーネーションのウイルス・フリー苗の生産技術を確立することができました。

しかしながら、ウイルス・フリー苗の組織を培養した母



売店がオープンした当時(1981年)



売店がオープンしたことを知らせる
地元紙の広告(下の半分)



アラフェラ農場



アラフェラ農場



アラフェラ農場には倉庫、事務所のほか、輸出植物をパッキングし、ショッキング時まで保冷する冷蔵庫も完備していた

株にウイルスが発生してくる時間的要素が、コロンビアに比較してかなり早く、経費が増大し、経営上はきわめて不利でした。ウイルス・フリー苗の流通についても、世界的大産地であるコロンビアでは、カーネーション栽培以来10年を経過してウイルス病が発生し始め、ウイルス・フリー苗の自家生産を行うことになり、当初に計画したコロンビアへのウイルス・フリー苗の輸出の道が絶たれました。切花栽培にあたっては、生産体制の遅延に加え、品質的に輸出商品として競争力を具備するにいたらず、当初計画したカーネーションの量産体制と輸出事業を断念し、全面的に観葉植物の栽培と輸出事業に計画を変更せざるを得ませんでした。カーネーションのウイルス・フリー苗の栽培適地としてすすめられていた第3農場用地の取得も、コスタリカの気候に適した植物の栽培を考え、観葉植物の栽培に適した土地にしばられていきました。そして、1982年後半からは、ドラセナ（幸福の木）を中心とした観葉植物の日本向け輸出事業を行うことになりました。

3 観葉植物栽培事業の経過

ロブレ第3農場の建設後は、サンタアナ第1農場との2農場体制を確立し、コスタリカ国内向け花卉栽培と販売、海外市場向け観葉植物の栽培と輸出を中心に事業を行ってきました。国内向けに温室でカーネーションやガーベラ、ポインセチアなどの植物を栽培し、それらの植物を売店で販売しました。また、コスタリカ産のドラセナ（幸福の木）を、当時、観葉植物がブームになっていた日本へ輸出できないかと考え、その道を切り開きました。このドラセナはサンタアナの土地で栽培しやすい植物であったので、カーネーションと比べて大量生産・大量輸出が可能でした。

コンテナによるドラセナの日本への輸出事業は大成功をおさめ、1984年には、これまで赤字が続いていたレイタク・

コスタリカ株式会社の決算が初めて黒字となるほどの収益をもたらしました。そして1986年には年間輸出高が100万ドルを突破し、コスタリカ国内における植物輸出高ベスト15にランク付けされるまでに至りました。また、これまでアメリカを中心に行ってきた葉物輸出の市場拡大をめざし、ヨーロッパ各地への営業活動も行ってきました。その結果、農場内で生産した植物の品質が高く評価され、オランダ、ドイツ、イタリアなどへの輸出事業が展開されました。

このように、現地原産または現地生産の植物を海外に輸出して外貨収入の道を開いたことは、現地法人設立の目的である「対外経済協力および技術援助」の上からも非常に意義深いことでありました。輸出事業が成功をおさめた後も、植物の品質管理、農場施設の充実、輸出市場の拡大、人材育成に力を入れて事業を推進してきました。

4 コスタリカにおける事業の中止

当協会は、現地法人のレイタク・コスタリカ株式会社の設立以来、13年間にわたってコスタリカにおいてサンタアナとアラフェラの2つの農場を経営し、花卉園芸植物の国内販売と日本への輸出販売を行い、一時期はコスタリカにおける植物輸出高ベスト15にランク付けされるに至りました。

しかし、レイタク・コスタリカ株式会社の事業は、継続的に日米欧に営業を続け、市場の開拓をする必要がありま



アラフェラ農場にて、コスタリカ駐在の小野大使夫妻（左から3人目と4人目）とともに



ディフェンバギアの鉢上げ



輸出用ポトスのベッド
(サンタアナ農場の第1湯室にて)

した。そして、それ以上の事業展開のためには多額の再投資と人材の継続的派遣が必要でした。

そこで、1991年6月、当協会役員4名が現地を視察した結果、再投資によるそれ以上の事業の拡大は困難であり、併せて13年間にわたって展開してきた事業の経過を踏まえて、協会がコスタリカへ進出した使命は達成されたと判断しました。出張した役員は帰国後、協会の理事会にて、レイタク・コスタリカ株式会社の事業を閉鎖し、農場用地と施設をコスタリカの公的機関へ寄贈することを提案し承認されました。

その後、在コスタリカ日本大使館に事情を説明し、ご指導を得て、コスタリカ政府へ農場用地の寄贈を申し出て、サンタアナ農場はコスタリカ大学農学部の研究施設とし、アラフェラ農場はアラフェラ州の公的施設として使用していただくことになりました。その後、1991年11月7日にコスタリカ大学へ、11月9日アラフェラ州への贈呈式が現地にて開催され、コスタリカ大学のガリタ・ボニージャ学長およびルイス・プリモ副学長、コスタリカのアーノルド・ロペスエチャンディ副大統領から廣池幹堂会長宛に感謝状を頂きました。



日本から輸入したサポテン

以上のように、1978年9月にコスタリカの現地法人として設立されたレイタク・コスタリカ株式会社は、「対外経済協力および開発途上国への技術援助」という当協会の目的に沿った十分な成果を残して1991年(平成3年)をもって閉鎖され、当協会によるコスタリカでの事業を全面撤退することとなりました。

〔4〕 事業の成果

コスタリカにおける花卉栽培事業を、当協会は15年間にわたって行ってきました。カーネーションの無菌苗栽培では、際立った研究成果を残すことはできませんでしたが、観葉植物の輸出事業では、コスタリカ国内での新たな輸出事業として大きな成果を残すことができました。特に観葉植物の輸出事業においては、アメリカ、ヨーロッパに加えて、新しく日本への輸出販路を生み出し、コスタリカ国内の花卉産業に革命を起こしました。レイタク・コスタリカ株式会社が、コスタリカ国内に新しい外貨収入の道を切り開いたといっても過言ではありません。その後、コスタリカ国内にも同じように輸出事業を営む企業が続出したことから、ここに当協会の「人材育成と技術指導」面の目的は達成されたと言ってもよいでしょう。

コスタリカでの15年間は、コスタリカ国内での輸出産業の確立という大きな成果を残したと同時に、開発援助が抱えるジレンマに直面した時期でもありました。そして、再度、援助のあり方を検討する機会が得られ、海外における事業は行わず、開発途上国へ派遣する人材の育成を活動の基盤とする方針が再確認されることになりました。「開発援助の基本は人材育成である」という援助の核となる、しかし見落とされがちなこの意義を再確認できたことこそ、コスタリカにおける事業の最も大きな成果ではないでしょうか。



研究所西側



サンタナ売店の内部

第3章 ネパールにおける支援事業

■ インドとチベットに接する内陸国 ネパール

インドとチベットに国境を接する内陸国のネパールは国土が約15万km²で、約3,000万人の人々が住んでいます。その緯度は沖縄と同位置で亜熱帯に属していますが、北に標高8,000m級のヒマラヤの山々を戴いているため、標高差が大きく、その違いによって気候が大きく左右されます。その領土の東・西・南をインドに囲まれ、ヒマラヤの北には中国が占領中のチベット自治区があります。このため、政治・経済面においてこの両大国の影響を受けざるを得ない状況にあります。



《現在のネパール事情》

(2021年1月現在)

● ネパール連邦民主共和国

- 面積：14.7万km²
- 人口：2,970万人（2019年、アジア開発銀行）
- 首都：カトマンズ
- 民族：パルパテ・ヒンドゥー、マガル、タルー、タマン、ネワール等
- 言語：ネパール語
- 宗教：ヒンドゥー教徒（81.3%）、仏教徒（9.0%）、イスラム教徒（4.4%）
- 政体：連邦民主共和制
- 通貨：ネパール・ルピー
1ルピー＝約0.880円（2019／2020年度平均値、ネパール中央銀行）
1米ドル＝約116.31ルピー（2019／2020年度平均値、ネパール中央銀行）
- 識字率：65.9%（2011年、国勢調査）
- 主要産業：農林業、貿易・卸売業、交通・通信業
- GDP（名目）：3兆7,568億ルピー（約323億ドル）（2019／2020年度、ネパール財務省）
- 一人あたりGDP：126,196ルピー（約1,085ドル）（2019／2020年度、ネパール財務省）
- 主要貿易品目：（1）輸出：糸、ウール、カーペット、衣類、大豆油等
（2）輸入：工業製品、機械類、石油製品等
（2019／2020年度、ネパール貿易輸出促進センター）
- 主要貿易相手国：（1）輸出：インド、米国、トルコ、ドイツ、英国
（2）輸入：インド、中国、アラブ首長国連邦、フランス、タイ、ベトナム
（2017／2018年度、中央銀行）
- 主要援助国（DAC諸国のODA実績）：
（1）米国 （2）英国 （3）日本 （4）ドイツ （5）ノルウェー
- 在留邦人数：1,124人（2019年10月1日現在、海外在留邦人数調査統計）
- 在日ネパール人数：96,824人（2019年12月1日現在、法務省在留外国人統計）

〔1〕 「ティテパティよもぎの会」への支援

① 直接支援から間接支援に移行

麗澤海外開発協会は、1978（昭和53）年9月、中米コスタリカ共和国に現地法人レイタク・コスタリカ株式会社を設立、国際協力事業団の融資を得て「花卉栽培試験事業」を実施し、協会の設立目的である「対外経済協力及び技術援助」に貢献してきました。しかし、1991年をもって事業は終了しました。



カトマンズにあるOTTC（東洋医学専門学校）の実習風景（1994年9月）

コスタリカでは、コスタリカ国内に株式会社を設立し、日本から駐在員を派遣して会社を運営してきました。日本人がコスタリカ国内で花卉栽培事業を成功させたことにより、その成果と可能性をコスタリカの人々に伝えることに成功しました。しかし、企業を経営するには優秀な人材が必要不可欠であり、そのような人材をコスタリカで育成するには至りませんでした。



OTTCの日本語授業風景（1994年9月）

そこで当協会の「寄付行為」に則って新たな事業を実施するため、1992年10月1日付で「事業計画検討委員会」を設置しました。委員会による発展途上国に関する調査が、タイ、ラオス、ネパールにおいて実施され、これらの調査の結果、ネパールで活動する「ティテパティよもぎの会」が実施するプロジェクトへの支援が、事業として有望であるとされ、当協会の活動はこのネパールへの支援を機に「直接支援」から「間接支援」へと移っていきました。

〈支援の内容〉

① 専門家の現地での指導に関する渡航費用・滞在費の支援



もぐさの原料となるネパール原生のよもぎ



乾季にとりこみ、もぐさを作るのは
生徒たちの仕事



棒状にした灸（棒灸）



OTTCの授業風景（1994年3月）

② 研修生の受け入れ事業

現地ネパール人スタッフを定期的に日本へ招聘し、必要な技術の研修を受けさせる。

③ 技術者の派遣事業

現地の事業をアシストできる人材を派遣する。

④ 日本からのスタディツアーの実施。

〈これまでの主な支援活動〉

1992年 ・ネパール東洋医学専門学校（OTTC）を視察。支援活動内容を検討。

1993年 ・畑美奈栄氏を専門家として派遣する。
・ラムマニ・カティワダ氏を滋賀県のもぐさメーカー（株）山正への第1期研修生として日本へ招聘する。

1994年 ・イスワル・ラズ・バラミ氏を第2期研修生として（株）山正へ招聘する。

1995年 ・ネパール東洋医学専門学校の校舎増設を支援。
・同校の4階建校舎が完成する。
・国際協力事業団ヘティテパティよもぎの会へのシニア協力隊を要請し、認可される。

1996年 ・ネパール東洋医学専門学校の第1回卒業式が行われる。

・同校の卒業生に「モラロジー賞」を授与する。

1997年 ・イスワル・ラズ・バラミ氏を国内鍼灸院の研修生として日本へ招聘する。

1998年 ・麗澤大学外国語学部日本語学科卒業生・田中靖子を現地事務局スタッフとしてネパールへ派遣する。

・サヌ・ナニ・バラミ氏を国内鍼灸院への研修生として日本へ招聘する。

2000年 ・カジェンドラ・ビクラム・スヌワル氏を日本へ招聘。手技療法治療院で研修を受ける。

2001年 ・ビシャール・シュレスタ氏を日本へ招聘。手技療法治療院で研修を受ける。

・イスワル・ラズ・バラミ氏およびデネッシュマン・ラケ氏を日本に招聘。もぐさ製造に関する技術研修を受ける。

2004年 ・ネパール・スタディツアーを実施して、海外ボランティア活動を体験学習し、ネパール社会への理解を深めた。

・日本大使館や当協会の協力を得て、カトマンズ市郊外のチャランケル村に建設された「クリニック兼もぐさ工場」が竣工し、新たな活動の拠点として始動した。

2009年 ・ビシャール・シュレスタ氏およびイスワル・ラズ・バラミ氏を日本に招聘して、技術向上のための研修およびネパールの鍼灸治療の現状報告会を行った。

2013年 ・専門家の現地での指導に関する渡航費用・滞在費の支援を終了した。

2 「ティテパティよもぎの会」の活動

〈「ティテパティよもぎの会」とは〉

「ティテパティよもぎの会」は、ネパールに東洋療法である鍼灸・マッサージ治療を普及し、ネパール人の健康回復に寄与するために、1992（平成4）年に設立されたNGOです。ネパール赤十字カトマンズ支部から、赤十字の敷地提供の提案があり、鍼灸技術者養成学校（OTTC・東洋医学専門学校）の建設と運営がしだいに具体化されていきました。そして、同校の運営を主導する畑美奈栄氏の知人を中心に、彼女の活動に賛同する人々が集まり、活動の資金援助を目的とした「ティテパティよもぎの会」が1992年6月に発足しました。



OTTC（東洋医学専門学校）の前に立つ畑美奈栄さん（1994年9月）



ネパールで好評の
よもぎパンとあんぱん



アマヘルスキャンプを手伝ってくれた
ボランティア鍼灸師（パタン市）



ヘルスキャンプ（地方巡回治療）の様子
（カトマンズ市内、1998年5月）



〈主な活動内容〉

① 第1期プロジェクト——OTTC（東洋医学専門学校）の設立

OTTC (Oriental Treatment cum Training Center／東洋医学専門学校) は、ネパール人に東洋医学の鍼灸、マッサージの技術と、西洋医学の基礎知識、日本語などの語学など、さまざまな知識を教える学校です。また、併設の治療院での実習や、近郊の農村などへの巡回治療奉仕、治療に使うもぐさづくりなど、経験を積むための実践の場も豊富にあり、ここに通う生徒たちは3年間のカリキュラムのなかで、さまざまなことを学びながら、自分たちの将来のための基礎づくりをしています。

OTTCの活動と、東洋医学の効果は、ネパール国内でも大変な反響を得ており、ネパール政府の要人をはじめ、さまざまな方がこの活動に賛同されています。また、1997年7月、同校はネパール赤十字カトマンドゥカトマンズ支部に運営が移行され、ネパール人による自主独立を果たし、現在まで数多くの優秀な卒業生を国内に送り出しています。

② 第2期プロジェクト——ヘルスキャンプの実施

「ティテパティよもぎの会」は1997年、ネパール社会福祉省に登録され、国際ボランティア団体 (INGO) として認可されました。同会は、これまでにOTTC卒業生とともに無医村への無料巡回治療を70回以上実施し、10万人以上の患者を治療しています。そして治療を受けた村と患者の多くから感謝され、再度の巡回治療実施の要望が数多く寄せられています。

朝まだ早いうちにカトマンズの事務所を出発し、巡回治療に行く先々では現地ボランティアや地元住民が準備を行い、ヘルスキャンプスタッフが到着する頃にはすでに村人が集まり、治療を待っています。患者さんの症状は多様なため、多岐にわたる鍼灸の

知識が必要となります。そこで、現地鍼灸師に具体的な症例を示しながら実地研修を行い、フォローアップ教育をしています。また、ヘルスキャンプを行うにあたっては実施地区のボランティアと何度もミーティングを開き、アシスタントとして活動するボランティアに“もぐさ”についての講義やお灸のトレーニングも行っています。

治療の灸に使用するもぐさの100パーセントは、ネパールに自生するもぐさで、ネパール人によって育てられたものを使っています。ネパールでは雑草として扱われていたよもぎを、医療品として認識されるまでに高めることができました。ティテパティよもぎの会では、ネパールに自生するよもぎを使用したさまざまな製品の開発も行っています。

今後は中国、日本に次ぐ世界第三番目のもぐさ生産国にするべく、ネパール人に対するもぐさ製造技術の指導と鍼灸師の育成に尽力するため、もぐさ工場兼クリニックも建設しました。また、主だった産業の少ないネパールで、障害を持った人々や女性にも雇用の機会を与えるために、もぐさを使用した簡単な治療法のトレーニングを行い、出来上がったもぐさを日本にも輸出しています。

3 アネコット村への支援

首都カトマンズの東北約70キロメートルの地点にあるバグマティ県カブレ郡アネコット村。ここは主にチベット系のタマン族が生活する標高約1,000メートルの山村です。この村に当協会は援助活動を行っています。

この村で農業を営むクリシュナ・バハドール・タマンさん。タマンさんは1974年8月に国際ロータリーの支援で来日し、青森県と秋田県を中心に研修を受けました。ここで一年間、野菜栽培管理、水稻収穫技術、畑作物収納貯蔵、各種果樹類剪定、蔬菜育苗などの実習、さらに肥料、農薬、





アネコット村のタマンさん宅の
屋上でRODA役員とタマン夫人
(中央)が記念撮影



アネコット村の
シュリカリカ小・中・高等学校



完成したもぐさ工場兼クリニック

農機具の扱い方なども学びました。

タマンさんはユースホステルを宿舎としていましたが、その管理者は小川^{ちかこ}親子さん(秋田県横手市出身)です。タマンさんは奥さんを病で亡くして、4人の子供がいました。親子さんはタマンさんの帰国後ネパールに旅立ち、アネコット村でタマン夫人となり4人の母親となりました。

タマンさんは帰国後、日本で学んだ知識・技術を生かし、家族とともに米やヒエ、トウモロコシのほか、さまざまな野菜の作付けを増やしていきました。また国際ロータリーの支援を受け、アネコット村で灌漑施設や水源地から1,000メートルの飲料用パイプを敷設しました。これらの施設により、稲を2回収穫し、そのあとに野菜を作付けするという三毛作までできるようになりました。タマン夫妻は、ネパール国内やインド、ブータンにまで出稼ぎに行くなどをして、農業施設や道路建設の資金を調達しました。村では農業技術のみならず、土地争い、水争いなど、さまざまな問題の解決にタマンさんを頼るようになり、現在ではなくてはならない指導者となっています。

[2] もぐさ工場兼クリニック、 無料巡回治療への支援

レポート

もぐさ工場兼クリニックの 竣工式典を挙行

(2004年4月)

ティテパティよもぎの会は、当協会ならびに日本政府の「草の根無償援助」をはじめ、団体・個人からの支援と協力を得て、カトマンズ市郊外チャランケル村に「もぐさ工場

兼クリニック」を建設し、2004年4月25日に竣工式典を挙行しました。

式典には、ネパール大蔵大臣プラカシ・チャンドラ・ロハニ氏、駐ネパール神長善次大使をはじめ、ネパール人関係者および当協会から廣池英行理事、木下廣太郎理事、白木和彦評議員、望月雄二評議員と日本からの支援者が参加して盛大に執り行われました。

ティテパティよもぎの会は、この施設を拠点にして女性や軽度の身障者を雇用して第三期事業である「もぐさ」の製造を行い、ネパールが中国、日本に次いで世界第3番目のもぐさ生産国になることをめざしています。併せてクリニックを開業し、巡回治療で完治しなかった患者や地元住民の治療を行っています。なお、本事業は、ネパール人が自主運営できるように援助体制を強化して進めています。

《施設の概要》

場所：チャランケル村(カトマンズ市の西南約15km)

土地：約600㎡

建物：鉄筋コンクリート3階建360㎡

1階：もぐさ工場／2階：クリニック／3階：会議室

「ネパール・スタディツアー」感想文

ネパールでの 無料巡回治療に参加して

(2004年2月)

加藤 智美(財団法人モラロジー研究所)

2004年2月、ネパールで鍼灸治療を続ける国際NGO「ティテパティよもぎの会」のヘルスキャンプ(以下、HC)に参加しました。このHCは、医師のいない村を訪れ、無料で治療を行うというもので、1998年から年に10～12回の割合で行われており、今回で69回目です。今回のキャンプ地は、首都カトマンズから車で1時間弱のところにあるダチ・バ



建物内の治療用ベッド



神長善次大使から建物の目録を
受け取るイスワル・ラズ・バラミ氏(左)



ドラバスという地域で、私たちは毎朝5時に起床し、約1時間かけてキャンプ地へ行き、7時頃から午前中の間は治療を行いました。

現在、ネパールの大都市に病院はありますが、地方にはまだまだ無医村が数多く点在し、栄養不足や不衛生な環境により、病気にかかる人が多いそうです。しかし、村から病院までの道のりは遠く、高額な治療費もかかるために、症状をそのまま放っておいてしまう人も少なくないといえます。実際に今回のHCでも、痛みや症状が数年前からずっと続いているという人がたくさんいました。

HCでは、私は患者さんの誘導を行いました。鍼灸師の方々は、患者さんの体の赤ペンで記したツボにお灸をすえていたのですが、患者さんが増え、診察を待つ人が増え始めると、私の中にある感情が生まれてきました。

それは、何もしてあげられないことに対するもどかしさです。

鍼灸資格のない私は、鍼灸師の方々が別の患者さんを診ている間、「エクチンパクスヌ（ちょっと待ってくださいね）」と言って、患者さんの体が冷えないよう、体にバスタオルをかけたり、灸ポット（火のついたもぐさを乗せた陶器のお皿）を乗せ、痛みを訴える患部をさすりながら、ただただ待つことしかできなかったのです。

“もし自分が鍼灸師の資格を持っていたら、もっと多くの方々の治療にあたることができるのに……”“せめてネパール語が使いこなせれば、患部から離れた場所に鍼灸を施すことに不安を抱く患者さんに、その理由を説明し、安心してもらえるのに……”

そんなもどかしさを感じる一方で、たくさんの喜びや驚きもありました。

このHCへの参加が決定した際に、「これだけは覚えてください」と渡された、HCで使う用語リストとネパール

語の初歩単語&会話リストを、私は必死で覚えました。しかし、発音を表すカタカナの文字を覚えてただけだったので、実際に現地で使い始めたときには、微妙な音の違いから、通じないことや聞き返されることが何度ありました。

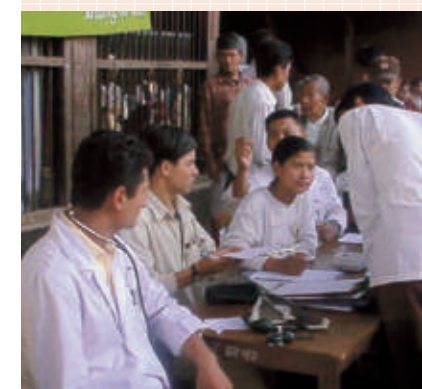
それでも“なんとか通じないものか”と、自分の周りで飛び交うネパール語の発音を聞き、その音を真似しながら一生懸命話そうとする私の前には、私の拙い言葉を理解しようとしてくれる、スタッフや患者さんの姿がありました。

そのやりとりを続けていくうちに、“なんとか伝えよう”というこちらの気持ちと、“なんとか理解しよう”という相手の気持ちが歩み寄ろうとしていることに気づきました。私は、お互いの心が歩み寄ることによってようやく言葉が通じたとき、そこに喜びや安心が生まれ、さらに互いの心も一歩近づけるのだということを実感し、「歩み寄りの心」の大切さを感じました。

また、次のようなこともありました。HCの最終日、私は終了時間の間に、長年手に力が入らないという年配の女性にお灸をすえるお手伝いをしました。お灸をすえ終わり、「シッディヨ（これで終わりです）」と伝えると、その女性は私の手をぎゅっと握り、（ネパール語で）「こんなに力が入るようになったの！ とってもうれしいわ。ありがとう、ありがとう」と言い、私たちスタッフに手を合わせて何度も何度もお礼を言いながら帰っていきました。

私はこのHCで、症状が軽くなり喜んで帰っていく患者さんの姿を数多く目にし、「ティテパティよもぎの会」会長の畑美奈栄先生が「十本の指と少しの医療器具さえあれば治療ができる」とおっしゃるとおり、東洋医学というもののすばらしさを目の当たりにしました。

今年（2004年）の4月でこのHCは終了し、現在はもぐさ工場に併設されている鍼灸クリニックで治療が続けられています。ネパールの大地で、このすばらしい活動が広がっていくことを願い、今後もこの活動に協力していきたいです。



コ ラ ム

驚異のよもぎパワー

(2006年7月)

畑 美奈栄 (「ティテパティよもぎの会」会長・鍼灸師)

ネパールのもぐさ工場では、もぐさが出来る過程で不要になったよもぎの粉が毎日たくさん出てきます。あまりに量が多いため、よもぎ風呂として活用するにも限界があり、捨てる場所に困っていました。

そんなとき、その粉を畑に捨てるようにしました。そしたらなんと、荒地のため、貧弱な野菜しか出来なかった畑から立派な作物が出来るようになったのです。

昨年、秋植えの種を蒔こうと土を掘り返してみると、たくさんのミミズが出てきました。中には小指くらいの太さの丸々と太ったミミズもありました。

土壌専門家や農業専門家が見学に来られ、「ミミズは糞をするので、それが土壌改良に非常に良い」と言われました。また別の専門家は「ネパールに来て、これほど柔らかい土を踏んだのは初めて、本当に良い土だ」と感心しておられました。

さらに作物には害虫も付かず、雑草もほとんど生えてきません。今、畑ではカリフラワー、エンドウ、ソラマメ、高菜、ほうれん草、大根、ジャガイモ、サツマイモ、落、ミョウガ、フキノトウが収穫出来る予定です。出来た野菜は有機栽培野菜を販売しているお店に置かせていただき、売り上げ(微々たる額ですが)はスタッフの昼食代の補助にしています。

そしてもう一つ驚きの発見があります。昨年12月から今年2月初めまでは霜が降り、屋根の上や土も白くなりました。しかし、周りの家の畑には霜が降りているのに、うちの畑には霜が降りなかったのです。これは、もしかするとよもぎの「保湿保温作用」の効果かもしれません。

これから毎年5,000kg以上の粉が出るので、それを市場に出すことを計画しています。手始めに、有機栽培に10年以上取り組んでいる農場に無料で提供し使っていただくことにしました。今年から直売所で週2回「有機肥料よもぎパウダー」として販売してもらうことになります。まだ月に50kgほどの販売量ですが、捨てる場所に困った結果として思わぬ効果を見出し、まさに「捨てる神あれば拾う神あり」とはこのことではないかと思っています。

コ ラ ム

現地鍼灸師の育成と巡回治療を進める (2011年6月)

木下 廣太郎 (麗澤海外開発協会常務理事)

ネパールは2008年に立憲君主制から連邦民主共和制に政権が変わり、共産党が実権を掌握しました。しかし、いまだに新憲法が制定されず、政治の混乱は続いています。一人あたりのGDP(国内総生産)は500ドル以下で、国民の生活は苦しさが増すばかりとなり、日本からのODA(政府開発援助)の予算も削減され、プロジェクトは減少しています。そんな状況にあって主要な道路建設やダム工事は進められています。

当協会では、無医村の住民や経済的に恵まれない人たちの健康回復を目的として、5本の指と簡単な器具で病気治療ができる日本の鍼灸治療を広めるため、日本から鍼灸師を派遣してカトマンズ市にネパール赤十字の協力を得て、「東洋医学専門学校」(OTTC)の設置と運営に協力しています。これまでに数十名の現地鍼灸師を育成し、巡回治療(ヘルスキャンプ)を6年間にわたって実施して延べ10万名の患者の治療を行いました。今年からはJICA(国際協力機構)のシニアボランティアとして日本から鍼灸師が派遣され、ネパール人鍼灸師の指導や患者の治療に従事しています。現在、ネパールで開業している鍼灸・指圧治療院のほとんどは「東洋医学専門学校」の卒業生によって構成されています。

同校は開校して20年近くが経過し、所期の目的は達成してきていますが、最近では経営状態が厳しくなり、授業料や治療費のみで教員の給与や諸経費が十分に賄えなくなり、建物も老朽化して修繕費等の費用も捻出できない状況になっています。このような問題を解決し、今後も継続して運営できる態勢を構築していくために、ネパール赤十字と真剣な協議を重ね、より質の高い鍼灸師を育成するための方策を検討していく必要があると考えています。



[3] ネパール大地震からの復興への支援

ネパール大地震復興支援レポート

一日も早い復興を願って (2015年12月)

木下 廣太郎 (麗澤海外開発協会常務理事)

2015 (平成27) 年4月25日にネパールで発生し、9千人以上が犠牲になった大地震から8か月がたちました。壊滅的な被害が出た山間部では道路が寸断したままで、救援物資の輸送が大幅に遅れています。国民の3割近くに当たる約800万人が被災し、学ぶ場を失った子供は約100万人、建物の被害はおよそ90万棟

にのぼりました。復興はなかなか進まず、今もなお250万人の被災者は生活物資の不足で不自由な生活を余儀なくされています。

ネパール政府は、今年度の予算で1,000億円あまりを投じて、住宅の再建などを進めることにしています。しかし、復興を一手に担う政府機関を設立するとしたものの、いまだ責任者も決まらず、宙に浮いたままです。また、いわゆる

復興計画のようなものもありません。ネパール政府だけでは資金もノウハウも不足しているのが現状で、引き続き国際社会からの支援により、これからの復興を支えていくことが求められています。

このような情勢の中、新憲法の改正を要求する住民がインドとの国境検問所を9月末に封鎖して以降、必需品の供給量が激減し、燃料や医薬品の不足が深刻化しており、十分な食

料や防寒具、医療等が提供されなければ「新たな惨事」が起こる恐れもあります。



地震発生時のカトマンズ市内



カトマンズ市内シタパイラ小・中学校の仮校舎

当協会が支援している「ティテパティよもぎの会」のスタッフが住むカトマンズ近郊のシタパイラ村では、住宅の倒壊によりスタッフの親戚が亡くなり、多くの住宅や学校には倒壊や亀裂があるため、粗末な仮住まいで電気や暖房もなく、不自由な生活を送っています。また、カトマンズ北東60キロのアネコット村では、建物の90パーセント以上が倒壊したため、被災者はトタン小屋や粗末な小屋で生活しています。

当協会では、皆様から寄せられた緊急募金を、下記のとおり、被害を受けた各団体にお届けしました。

1. 緊急募金額：971,000円 (個人・団体72件)
2. 募金配布先：ネパール「よもぎの会」／アネコット村



カトマンズ市内の仮設テント



ネパールでの支援事業報告

生徒たちが安全・意欲的に学べる環境づくりを進める

(2017年11月)

吉積 勇人 (青年海外協力隊員としてシュリカリカ高等学校に派遣)

2015 (平成27) 年4月25日に発生したネパール大地震によって被害を受けたネパールのアネコット村にあるシュリカリカ小・中・高等学校。同校で支援活動を行っている青年海外協力隊 (JOCV) から派遣されシュリカリカ高等学校に教員として勤務する吉積勇人氏から、麗澤海外開発協会からの支援事業を含めた「支援事業報告書」(2017年11月25日付) が寄せられました。その概要を紹介します。



手前は、シュリカリカ小・中・高等学校の仮校舎

整地によって向上した学校での指導内容

アネコット村は首都カトマンズから東北へ70キロほどのところに位置し、村人は「タマン」と呼ばれる民族で構成されています。バスは1日に1本で、アクセスには恵まれていません。

シュリカリカ小・中・高等学校（1～12年／全校生徒数250名）は、大地震による被害を受けた後、1年以上にわたって窓もドアも壁もない校舎が存在していました。2016（平成28）年12月に修復工事が始まり、麗澤海外開発協会（RODA）からの支援金により校庭の整地を行いました。それが学校の貴重な敷地となり、子供たちは今までできなかったサッカーを楽しむなど、地域の憩いの場としても機能しています。

整地が行われたおかげで、今まで滞っていた朝礼が再開され、整列指導から国歌指導等、これまで実施できなかった教育活動が可能になりました。国旗を掲揚することで指導内容の質が上がり、朝礼の整列指導によって、教室内でもきちんと並び、順番を待つという習慣が身に付き、子供たちの規範意識にも良い影響が出ています。

美化活動に対する意識も高まる

ネパールの学校には清掃活動はなく、掃除は汚いものを扱う身分の低い人たちの仕事という意識が依然としてあります。その影響もあり、首都のカトマンズでさえ街中にゴミがあふれています。同校では問題意識をもって以前から清掃活動を行っていましたが、ゴミ箱

を学校に設置したことによって、美化活動に対する生徒の意識がいちだんと向上しました。以前はポイ捨てされていたゴミを拾うだけの活動でしたが、ゴミは捨てずにゴミ箱へ入れるという習慣が定着し始め、校内のゴミが激減したのです。また、自主的に掃除をする日も多くなりました。

防災教育で日本の避難訓練等を紹介

2017年8月にはJICAボランティアによる防災教育を実施しました。ネパールでは、地震に対する知識や避難方法等に関して教育を受ける機会がありません。避難訓練を実施するにあたり、教員や地域の方たちを対象に日本の避難訓練の様子や地震のメカニズムを紹介しました。その際にプロジェクターは非常に役立ち、効果的な研修を行うことができました。翌日には、ネパール人の教師たちによって避難訓練が実施され、新しいホワイトボードやメガホンは生徒への指導や誘導に大きな役割を果たしました。

＊

このように、これまでの支援によって生徒を取り巻く環境が非常に豊かになり、教育活動の質がいちだんと向上しました。学校の整地に始まり、清掃活動、防災教育、日々の授業支援など、さまざまな温かい支援のおかげで、生徒たちが安全かつ意欲的に学習できる環境が実現されつつあります。今、ここに感謝の意を込めてご報告いたします。



新たに準備したゴミ箱



地震復興工事の模様



シュリカリカ小・中・高等学校を訪問したRODA役員に現状を報告する吉積さん



新築中の新校舎



校内を清掃する生徒

第4章

タイとカンボジアにおける
支援事業

1 タイにおける支援事業

タイ王国は、東南アジアに位置する立憲君主制国家で、その基礎は13世紀のスコータイ王朝より築かれ、アユタヤ王朝(14～18世紀)、トンブリー王朝(1767～1782)を経て、現在のチャックリー王朝(1782～)に至ります。そして1932年、立憲革命により現在の立憲君主制となりました。

日本とタイの両国は600年にわたる交流の歴史を持ち、伝統的に友好関係を維持しています。長年にわたる両国の皇室・王室間の親密な関係を基礎に、政治、経済、文化等、幅広い面で緊密かつ重層的な関係を築いていて、人的交流は極めて活発です。



《現在のタイ事情》(2020年10月現在)

●タイ王国

- 面積：51万4,000km²(日本の約1.4倍)
- 人口：6,641万人(2018年)
- 首都：バンコク
- 民族：大多数がタイ族。その他は華人、マレー族等
- 言語：タイ語
- 宗教：仏教 94%、イスラム教 5%
- 政体：立憲君主制
- 通貨：バーツ
- 産業：製造業(GDPの約34%)、農業(GDPの約12%)
- GDP(名目)：5,436億ドル(2019年、IMF)
- 一人当たりGDP：7,810ドル(2019年、IMF)
- 主要貿易品目：
 - (1) 輸出：自動車・同部品、コンピュータ・同部品、機械器具、農作物、食料加工品
 - (2) 輸入：機械器具、原油、電子部品
- 主要貿易相手国・地域：(2019年、タイ中央銀行)
 - (1) 輸出：1. 米国(12.7%) 2. 中国(11.8%) 3. 日本(10.0%)
 - (2) 輸入：1. 中国(21.3%) 2. 日本(14.1%) 3. 米国(7.3%)
- 在留邦人数：75,647人(2018年10月現在)
- 在日タイ人数：54,809人(2019年12月現在)

[1] メーコック財団への支援

● 教育の機会に恵まれない子供たちへの
教育支援を行う

メーコック財団(旧・メーコック・ファーム)は、タイ北部の小・中学校で教師を18年間務め、1991年にチェンライ郊外において観光による地域の発展のために活動しているタイ人のピパット・チャイスリン氏が、麗澤大学・竹原茂教授と聖学院高校・戸部治朗教諭の協力のもとに立ち上げた「現地の問題解決と生活の質の向上を目指したNGO」です。海外からのスタディツアーを通して現地の問題への理解者と支援者を得るとともに、訪問者に現地での体験の場を提供することで、相互理解に基づく協力関係を築いてきました。

当初は、麻薬患者の更生と職業訓練を目的として活動し、総計150名のうちの約70%の患者の麻薬中毒脱却に成功しました。主に山岳民族を対象に実施してきましたが、それだけでなく、併せて都市部の青少年を対象とした麻薬治療とリハビリテーション活動を行い、職業訓練やセミナーを通してさまざまな問題解決にも貢献してきました。

2000年からは、活動の重点を生活の質の向上に移して、教育支援活動をメインにさまざまな支援活動を展開しています。教育支援活動においては、貧しくて教育の機会に恵まれない総計125名の子供たちの教育支援(奨学金制度)を行ってきました。

また、貧困等により、教育を受けられない環境にいる山岳民族の子供たちをメーコック財団の施設内に受け入れ、



メーコック財団の入り口



ピパット・チャイスリン氏の野外講話



民族衣装で記念撮影



メーコック財団での清掃作業



メーコック財団内の食事



メーコック財団の寄宿舎で生活する小学生

メーコック財団代表
アノラック・チャイスリン氏

メーコック財団内の教会

学校教育による学業支援のみならず、基礎的な農業技術から養鶏、魚の養殖、ハンディクラフト等の技術や知識、経験の取得支援を行っています。そして、幼稚園児から中学生まで24名の山岳民族の子供たちがプロジェクト内で寝食を共にしながら教育を受けています。

2003年3月にタイ政府より財団法人「メーコック財団」として認可され、より安定した活動・運営とより充実した教育支援をめざし、また現地における諸問題の解決と生活の質の向上にいっそう貢献できるよう日々努力しています。

子供たちの生活 ——規則正しく、自主性を重んじる

メーコック財団で生活する子供たちは、基本的に「自分たちのことは自分たちで」という方針で生活し、規則正しく、また自主性を重んじる毎日を送っています。学校教育による学業支援のほか、基礎的な農業技術から養鶏、溶接、建築、ハンディクラフトなどの職業訓練や知識取得への支援を受けています。

土曜日は、職業訓練の一環として畑の作業、溶接訓練などを行います。各自の当番の仕事や洗濯などが終わると自由時間になり、サッカーやセパタクロー（球技の一種）などで遊んだり、ギターを弾いたり刺繍をしたりしています。

日曜日については、午前中は教会へ行き教育を受け、午後は土曜日の自由時間のような過ごし方をしています。

このように多くの時間が、子供たちの「自立」のための訓練にあてられています。この中であって、子供たちは規則正しい生活を楽しみ、このような日々を送れることに感謝しながら元気に生活しています。

メーコック財団の現状

2020年、メーコック財団が新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受けて運営が困難になったことから、麗澤海外開発協会（RODA）ではこれまでの支援に加えて緊急支援を行いました。

タイでは2020年5月以降、感染者数は抑えられてきましたが、12月に入り1日300人前後の感染者が出たため、タイ政府は非常事態宣言を2021年2月末までに延長する方針を決定するなど、いまだに収束が見えていません。

タイ政府によりロックダウンが実施された後、メーコック財団への訪問ができなくなり、ゲストハウスとスタディツアーの収入が一切なくなりました。通常は、それらの収入の一部を子供たちの食費やスタッフの給料にあてていただけに、厳しい状況に置かれています。

タイの多くの子供たちは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、自宅でオンライン授業を受けられるようになりましたが、メーコック財団の子供たちはほとんどが山間部に住んでおり、インターネットもないため、簡単ではありませんでした。その中であって子供たちは、勉強や訓練に励みながら生き生きと生活しています。

〔2〕 バンコク・スラムへの支援

タイ王国は一定の経済成長を遂げる中、一方では大きな格差を抱えていて、それが構造的な社会問題となっっています。同国の首都バンコクには約2,000のスラムがあり、そこには約200万人が暮らしていて、不安定な生活を強いられています。そこで暮らす子供たちは児童労働に携わったりして、十分な教育を受けられずにいます。このように十分な教育の機会が与えられないまま成人になっても、就労機会が制限されるため、さらなる格差の拡大につながって



1歳のころからメーコック財団で暮らすファーストくんも元気に育っています



子供たちが絵を描いたギフトボックス





移動図書館で人形劇



移動図書館で紙芝居



モバイルラーニングセンター

います。これらの負の連鎖を断ち切るためにも、スラムにおける教育機会の充実が喫緊の課題となっています。

さらに、2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大により、タイ国内の経済は大打撃を受けていて、もともと不安定な生活環境にあるスラム住民はあっという間に就労機会を失い、子供たちは生活することさえ厳しい状況に置かれています。

このような状況の中、JILAF (Japan International Labour Foundation - Thailand/所長・関口輝比古) では、2020年度から麗澤海外開発協会の支援を受け、バンコクのオンヌット64小路にあるスラムへの教育支援事業を実施しています。このスラムにはミャンマー人の移民労働者(約400名)が居住し、その大人たちは主にゴミ集積所周辺での日雇いのゴミ拾いとゴミ分別の仕事に従事していて、学校に通えず親と一緒に働く子供たちもいます。また、他のスラムよりも衛生環境が悪く、健康に悪影響を与えていて、新型コロナウイルスの予防も十分ではなく、早急な支援を必要としていました。

そこでJILAFを中心に、シーカー・アジア財団や国営企業労働組合連盟等による作業委員会を設置し、区役所やコミュニティリーダー等と連携しながら支援活動を進めました。2020年度は新型コロナウイルス感染拡大による度重なるロックダウンや行動制限(2020年4月中旬から8月初旬、12月下旬から2021年2月中旬)があったため、活動実施期間が限られましたが、麗澤海外開発協会からの支援も加わり、以下の成果を得ることができました。

- ① モバイルライブラリー事業(計13回)を実施。スラムの子供たち(ミャンマー人50%、タイ人50%)に教育を通して将来への希望を与えることができ、子供たちの想像力を育て、集中力を高め、語彙を増やす等の効果がありました。
- ② モバイルラーニングセンターを設置。スラムのミヤ

ンマー人の子供を対象にミャンマー語のクラス(計6回)を設け、ミャンマー人の子供13人(男児5名、女児8名)にミャンマー語の読み書きを学ぶ機会を提供しました。

- ③ タイ人、ミャンマー人の青少年や大人を対象としたマスクや消毒ジェル、常備薬の配布と公衆衛生に関する教育(計5回)を実施。コミュニティ内の新型コロナウイルスの感染を予防することができました。

これらの事業について、関係者(コミュニティ、各家庭、区役所等)との緊密なコミュニケーションがとれたことから、関係者の事業、教育に対する関心、理解を深めることができ、コロナ禍の行動制限により限られた期間にも関わらず、スムーズに実施することができました。

JILAFでは、引き続いて麗澤海外開発協会からの継続的な支援を受けることができ、これらの教育活動をいっそう充実させるとともに、今以上の教育活動(ミャンマー人子供達に対するタイ語教育の追加や失業したコミュニティの青少年、大人たちを対象とした職業訓練教育等)を推進し、コミュニティ内の生活向上と子供たちの将来の選択肢を増やせるような事業を進めています。

[3] タイ・スタディツアーを定期的に行う

2003(平成15)年からほぼ毎年、主にタイ・チェンライ近郊のメーコック財団を訪問し、山岳民族の子供たちと触れ合うタイ・スタディツアーを実施してきました。このツアーには、これまで学生・生徒・青年たちを中心に約120名が参加しました。参加者の多くは、訪問先の人たちとの交流や現地での生活体験を通して新



日本大使館員がコミュニティ訪問



マスクの配布



メーコック財団の生徒とスタディツアー参加者



ピパット氏(右)と竹原前副会長(中央)



な気づきを得るとともに、国際協力への理解を深めています。ここに参加者の感想文の一部を抜粋して紹介します。

タイ・スタディツアー参加者の感想(抜粋)

- ◆タイ・スタディツアーに参加し、生まれて初めて真剣に、人に何かをしてあげたいと思いました。
- ◆私にとってこのツアーは、あらためて自分の行いを見つめ直す機会となりました。タイの人たちのように私たちも自国に誇りをもって、国際社会に名誉ある地位を占めることができるように努力しなければならないと思いました。
- ◆毎日快適な生活をしているのに、それよりもさらに快適な生活にしようとしている私たち日本人は、ほんとうにぜいたくな人間だなと思いました。
- ◆自分にはいったい何ができるのだろうと考えています。これからは自分にできることで協力していきたいと思います。
- ◆メーコックでの一週間は、自分の今の生活がどれだけ恵まれているかを考えさせられました。
- ◆メーコックの子供たちは、自分で責任を持って毎日の食事・洗濯・掃除などを積極的にこなしていて、感心させられることばかりでした。いかに自分が日本の生活の中で甘えながら生活しているか、いかに恵まれた環境にいるかを思い直し、日々の生活に感謝の気持ちを忘れてしまっていることを反省させられました。
- ◆私たち日本人はいかに幸せかということを自覚する必要がある、と感じました。
- ◆テレビや電話のない生活や、水のシャワーのお風呂を体験し、鶏を初めて一羽さばいたことなど、日本ではできない貴重な経験ができて、すごくよかったです。子供た

ちとは言葉が通じなくても、心は通じ合えた気がしました。

- ◆子供たちを見て、“なんて明るく素直で、何事にも一生懸命なんだろう。そして、なんでこんなにきらきらと目が輝いているんだろう”と素直に感じました。
- ◆自分も子供たちといっしょに農作業をしたが、暑くて、虫が多く、日本の農作業と比べてほんとうに厳しい労働条件だと思いました。タイのアリは人をかみませんが、現地の子供たちを見ていると、それでも平気で作業をしていて、彼らのたくましさを感じました。
- ◆私はタイの中学二年生のクラスで日本語を教えたのですが、大声で発音してくれるので、教える自分も大声になりました。日本の中学生だったら、英語の授業でこんな大声は出ない。タイの彼らは、ほんとうに学ぶことを楽しんでいるように思えました。
- ◆「メーコックは、だれもが成長できる場である」と責任者のピパットさんが話してくれたのを思い出します。ここに来ると、いつも物に囲まれた便利な暮らしの中にいる人間から、ありのままに生きる人間に戻れる気がします。
- ◆恵まれた環境で育った私たちにとって、貧しくて不便な生活とすることも、そこで毎日暮らしている人々にとっては、それが快適な生活かもしれません。洗濯物を手で洗ったり、シャワーが水だったりというだけで大変だと思ってしまった自分を、とても恥ずかしく思いました。
- ◆メーコックでは、私たちと比べて確実に不自由な生活の中、子供たちがほんとうに純粹でたくましく、生き生きとしていました。人の心は物でなく環境に育てられるのだなと思いました。「メーコックでは、農作物とともに人も育てられる」というピパットさんの言葉が感動的でした。子供たちの家庭内事情にも驚きました。無邪気に笑って

ゴールドトライアングルで
(タイ、ラオス、中国国境)

竹原前副会長と麗澤大学生



象乗り体験



いる笑顔の裏には私の知らない世界があるのだろう、と胸が痛みました。

◆食堂のいすや机も子供たちが作ったと聞いて驚きました。子供たちは明るく元気で、つらい様子が見えませんでした。殺人や幼児虐待などの多い日本を考え、ほんとうの幸せとはなんだろうかと考えさせられました。

◆自給自足で生き生きと生活する子供たちをみて、便利さだけが人を幸せにするのではないと感じました。

◆山岳民族の生計は民芸品の手作りなどで営まれているが、それだけでは生活は苦しい。村人が貧しいために、子供の教育にまで手が回らないのです。親は麻薬に手を出し、麻薬中毒になり、お金を麻薬に費やさざるを得なくなり、さらに貧しくなります。そうすると子供が働かざるを得なくなり、教育が受けられなくなり、悪循環になっています。

◆麻薬中毒や麻薬売買の問題は、山岳民族の人々にとって大変な問題なのだと再認識しました。そのような問題が貧困をもたらし、犯罪の発生や家庭の崩壊となってしまいます。そのため、子どもたちは教育を受ける機会がないまま、また同じことを繰り返してしまいます。なんとも深刻な問題であると思いました。



2 カンボジアにおける支援事業

カンボジア王国は、9世紀から13世紀まで現在のアンコール遺跡地方を拠点にインドシナ半島の大部分を支配していましたが、14世紀以降にタイ、さらにベトナムの攻撃により衰退しました。そして、1884年にフランスの保護領として「カンボジア王国」が建国されました。1953年、カンボジア王国としてフランスから独立し、1970年にロン・ノルたちの反中親米派のクーデターによりシハヌーク政権を打倒して王制を廃し、クメール共和制に移行しました。

1975年、親中共産勢力のクメール・ルージュとの間で内戦となり、クメール・ルージュが内戦に勝利して民主カンボジア（ポル・ポト）政権を樹立し、同政権下で大量の自国民が虐殺されました。その後1991年にパリ和平協定が成立し、国連カンボジア暫定機構（UNTAC）の監視下で制憲議会選挙が実施され、王党派のフンシンベック党が勝利しました。それによって新憲法が制定されて王制が復活、ラナリット第一首相（フンシンベック党）、フン・セン第二首相（人民党：旧プノンペン政権）の2人首相制連立政権を樹立しました。1997年、プノンペンで両首相陣営による武力衝突となり、ラナリット第一首相が失脚。1998年に第1回国民議会選挙でフン・セン首班連立政権が発足し、以後、5回の国民議会選挙が実施されてフン・センが勝利し、現在に至っています。



《現在のカンボジア事情》(2020年10月現在)

●カンボジア王国

- 面積：18万1,000km²
- 人口：1,530万人(2019年)
- 首都：プノンペン
- 民族：人口の90%がカンボジア人（クメール人）
- 言語：クメール語
- 宗教：仏教（一部少数民族はイスラム教）
- 政体：立憲君主制
- 通貨：リエル
- 主要産業：サービス業（GDPの約42%）、工業（GDPの約32%）、農業（GDPの約25%）
- GDP（名目）：260億米ドル（2020年、IMF推定値）
- 一人当たりGDP：1,655米ドル（2020年、IMF推定値）
- 貿易総額：（2020年、カンボジア商業省統計）（1）輸出：172億米ドル（2）輸入：186億米ドル
- 主要貿易相手国：（2020年、カンボジア商業省統計）
（1）輸出：米国（30.5%）、EU（18.6%）、中国（6.3%）、日本（6.1%）、英国（4.8%）
（2）輸入：中国（37.7%）、タイ（15.2%）、ベトナム（14.1%）、EU（3.5%）、日本（3.4%）
- 主要援助国・機関の支援額：（2020年推計値）（単位：百万ドル）
中国（421.6）、日本（336.5）、ADB（283.1）、世銀（140.8）、EU（90.3）、韓国（58.0）、米（43.9）
- 在留邦人数：4,216人（2019年10月現在）
- 在日カンボジア人数：15,656人（2020年6月現在）

小学校への教育支援を行う

● カンボジアの2校の新校舎を建設 (MIRC) ●



新校舎の工事着工セレモニーの様子

カンボジアの小学校の再建事業は、当協会（麗澤海外開発協会／RODA）の関連団体であるMIRC（モラロジー国際救援推進委員会）が2004（平成16）年3月にトラム・クラ小学校（コンポントム州コンボン・スヴェア郡）、2007（平成19）年にトム・オー小学校（コンポントム州サンダン郡）の2校の老朽化した校舎に代えて新校舎を建設し贈呈しました（本書71～72頁に関連記事を掲載）。

● ベン・ロヴィア・レー小学校の新校舎を建設 ●



完成したベン・ロヴェア・レー小学校の新校舎

2011（平成23）年9月、当協会がカンボジア教育支援事業として進めていたベン・ロヴィア・レー小学校（コンポントム州サントウック郡）の新校舎が竣工しました。この小学校はカンボジアの首都プノンペンから西北約300kmのところにあり、シャンティ国際ボランティア会（SVA）カンボジア事務所の建設協力により同年3月18日に着工したものです。9月に竣工した後、12月21日に同校で小学校贈呈式が行われ当協会からは堀内一史理事が出席しました。



ベン・ロヴェア・レー小学校校長から感謝状贈呈



贈呈式の午後から行われた式典には、SVAプノンペン事務所長とスタッフ、コンポントム州の行政関係者、教育関係者、カンボジア人僧侶、住民、教員・児童等、約400名と多くの方々の参列があり、村の教育発展に対する関心の高さが感じられました。

式典は小学校の校庭で行われ、僧侶による読経、カンボジア国歌斉唱で始まりました。その後、コンポントム州代表より当協会に対して、メダルや感謝状が授与され、村人や子供たちに囲まれ、非常に温かい雰囲気が進められました。当協会からは、ノートや鉛筆などの文具類、またサッカーボールなども贈呈しました。子供たちは、嬉しそうな顔でボールを抱えていたのが印象的でした。



新校舎前でテープカット



◀ 記念プレート



新校舎前で教員・児童と記念撮影

第5章

未来を拓く継承と発展

[1] MIRC (モラロジー国際救援運動推進委員会) の事業を統合

① モラロジーの精神に基づいた支援活動

平成20(2008)年4月、麗澤海外開発協会(RODA)は、それまで28年間にわたって国際救援活動に取り組んできたMIRC(モラロジー国際救援運動推進委員会)の事業を統合しました。

MIRC発足の端緒となったのは、昭和50(1975)年のベトナム戦争終結に前後して発生したインドシナ難民に対する救援運動です。ベトナム、ラオス、カンボジアにおける共産主義政府の樹立によって、膨大な難民が国外へ流出し、深刻な国際問題となりました。これらの難民に対して、国際機関をはじめ世界各国から人道的な救援の手が差し伸べられました。モラロジー研究所(現・モラロジー道德教育財団)では、全国の青年が中心となって募金活動などの救援運動を展開し、同研究所内に「インドシナ難民救援運動事務局」を設立しました。それが後にMIRCへと発展したのです。

総合人間学のモラロジーを創建した廣池千九郎博士(法学博士・1866~1938)は、青年教師時代から、災害が起こるといち早く行動を起こし、率先して罹災者の救援活動に従事しました。罹災者だけでなく、病人や孤児など弱者に対する廣池博士の献身的な援助は、生涯を通じて変わることはありませんでした。その著書『道德科学の論文』に「臨時の慈善事業、たとえば、天災・地変・戦争・流行病等にて一般人の困難せる場合にあたりては、無条件をもって物質的救済をなすことは人道上当然のことであり



バングラデシュ

ます」と記されているように、人々を苦しみの中から救済するという抜苦与楽の思想、慈悲心がモラロジーの根幹となるものです。

MIRCは、麗澤海外開発協会と同様にこのモラロジーの精神に基づき、難民問題だけにとどまることなく、開発途上国への教育・生活支援など、世界の各国で過酷な状況に置かれている人々に対する支援活動を進めてきました。

麗澤海外開発協会では、このMIRCの事業を統合し、MIRCが校舎を建設したカンボジアでの2校の小学校(トラム・クラ小学校とトム・オー小学校)への支援も引き継ぎ、今、モラロジー団体としての海外協力活動のいっそうの活性化に努めています。



タイ

② MIRCが建設したカンボジアの小学校への支援を引き継ぐ

① トラム・クラ小学校の校舎・トイレ棟・配水システム

2004(平成16)年、MIRCはシャンティ国際ボランティア会(SVA)の協力を得て、カンボジアのコンポントム州コンボン・スヴェア郡のトラム・クラ小学校に校舎(3教室等)を建設しました。前年の12月に着工してから順調に工事が進み、2004年3月には校舎、トイレ棟、配水システムが完成しました。そして、備品等が整った4月から新教室として使用されています。

2005(平成17)年2月25日行われた贈呈式には、MIRCの第1回カンボジア・スタディツアーの一行も出席し、小学生たちとの交流も行われました。



新しくなったトラム・クラ小学校の校舎



児童たちの表情も明るく

② トム・オー小学校に校舎を建設——6学年の完全校に
MIRCでは、トラム・クラ小学校建設の後、引き続き学校建設事業を展開するために「カンボジアに学校を贈ろう!」キャンペーンを実施。2007(平成19)年に、同じコンポントム州のサンダン郡トム・オー村に2校目の校舎を建設しました。同年9月、MIRCの第4回スタディツアーの一行がトム・オー小学校を訪れ、伝統儀式に則った学校建設の地鎮祭に参加しました。

半年後の2008(平成20)年3月には、校舎の竣工式および贈呈式が行われ、第5回スタディツアーの一行が同小学校を訪れ、これらの式典に参加しました。州知事夫妻が臨席し、村人や関係者300名以上が参加しました。式典後の記念会食では、村人手作りの料理が振る舞われ、新校舎の完成を心から喜ぶ村人の気持ちが伝わってきました。

当初40名で3学年までだったトム・オー小学校は、この校舎の完成によって、3年後には6学年までの完全校となりました。

[2] アジアの子供たちへの教育支援をめざしたチャリティーコンサート

第1回 チャリティーコンサート ～アジアの子供たちに学校を!!

平成20(2008)年9月28日(日)、麗澤海外開発協会主催による初めてのチャリティーコンサートを千葉県市川市の行徳文化ホールにおいて開催し、約380名の方々が来場されました(協力:麗澤大学サークル「プアン」/後援:財団法人モラロジー研究所、麗澤大学、麗澤中学・高等学校)。

第1部では、当協会ならびに麗澤大学ボランティアサークル「プアン」の活動紹介と、当協会の竹原茂理事のご家族による発表、第2部では5組のアーティストによる音楽コンサートを行いました。会場では多くの方々にタイの民芸品の購入や寄付金の協力もいただき、本会における収益金はタイ北部の子供たちの教育施設への運営支援およびラオスのタート・インハン小学校の図書館建設等に活用することができました。

第2回 チャリティーコンサート ～アジアの子供たちに教育支援を

第2回チャリティーコンサートは、「アジアの子供たちに教育支援を」を目的に平成23(2011)年12月3日(土)、東京都千代田区立内幸町ホールにおいて開催、当日は雨天にもかかわらず約200名の方々が来場され満席となりました(協力:麗澤大学ボランティアサークル「プアン」「RISOVP(リソップ)」/後援:千代田区、公益財団法人モラロジー研究所、麗澤大学、麗澤中学・高等学校)。

第1部では、当協会ならびに麗澤大学ボランティアサークル「プアン」と「RISOVP」の活動紹介が行われ、第2部ではアマチュアオーケストラ「麗しの森アンサンブル」によるクラシックの名曲とクリスマスメドレーの演奏と「フレーベル少年合唱団」による合唱が披露されました。

また、エントランスホールでは国際協力活動に関する展示が行われ、タイ、ラオス、ネパールの民芸品の購入や寄付金にもご協力をいただきました。本公演の収益金は、タイ、ラオス、カンボジア等、アジアの子供たちの教育支援に活用することができました。



大評判だったフレーベル合唱団
(第1回チャリティーコンサート)



「プアン」による発表
(第2回チャリティーコンサート)



エントランスホール
(第2回チャリティーコンサート)



エントランスホールでの展示と
民芸品等の販売
(第2回チャリティーコンサート)



式典に参加したトム・オー小学校の
児童たち



麗澤海外開発協会のこれまでの歩みや
「プアン」の活動を紹介
(第1回チャリティーコンサート)



出演者みんなでフィナーレ
(第1回チャリティーコンサート)

第3回 チャリティーコンサート ～アジアの子供たちに教育支援を

第3回チャリティーコンサートは、第2回に引き続いて「アジアの子供たちに教育支援を」を目的に平成26(2014)年12月7日(日)、東京都・千代田区立内幸町ホールにおいて開催、150名の方々が来場されました(協力:麗澤大学ボランティアサークル「プアン」[RISOVP(リソップ)]/後援:公益財団法人モラロジー研究所、一般社団法人日本道経会、麗澤大学、麗澤中学・高等学校)。

第1部では、設立以来40年以上にわたる当協会の歩みと当時の活動内容を映像で紹介、第2部の「心をつなぐコンサート」では、最初に麗澤高等学校吹奏楽部「サクスアンサンブル」が、トークを交えながらクリスマスメドレー等を演奏、続いてコーラスグループ「AIM Singers(エイム・シンガーズ)」の合唱、最後に「フレーベル少年合唱団」の合唱が披露されました。子供たちのかわいいコーラスに自然と手拍子が起こり、参加者の表情も自然とほころんでいました。

また、エントランスホールでは、麗澤大学ボランティアサークル「プアン」と「RISOVP」の協力のもと、海外支援活動に関する展示とタイの少数民族やラオスでの手作り品の販売も行われ、これらのイベントを通じて、参加した多くの方々に海外協力の意義と当協会の活動を理解していただき、多くのご支援をいただきました。本公演の収益金は、タイ、ラオス等での教育支援に活用することができました。



麗澤海外開発協会の歩みと活動内容を
紹介(第3回チャリティーコンサート)



多くの方々にご来場いただきました
(第3回チャリティーコンサート)



麗澤高等学校「サクスアンサンブル」
(第3回チャリティーコンサート)



海外支援活動の展示とタイ、ラオス
での手作り品の販売も行われました
(第3回チャリティーコンサート)

[3] アジアからの留学生を招聘

麗澤海外開発協会(RODA)では、竹原茂前副会長の名を冠した「竹原基金」を創設して、平成26(2014)年から留学生を招聘して麗澤大学別科日本語研修課程で学びました。令和2(2020)年に麗澤大学別科日本語研修課程での募集が終了したため、留学生招聘事業は休止されましたが、この6年間でラオスから5名、ネパールから1名の留学生を招聘できました。招聘された留学生は、日本語や日本文化、歴史、生活習慣等を学び、自身の学力向上において大きな成果を上げました。

留 学 生					
	氏 名	年齢	性別	国 名	留学期間
1	ウドムスック・スリントーン	19	男子	ラオス	2014年3月 ～2015年2月
2	サイヤリン・プッタソーン	22	女子	ラオス	2015年9月 ～2016年8月
3	ブンタヴィー・サイヤー	22	男子	ラオス	2016年9月 ～2017年8月
4	ルアンアパイ・ハナコ	20	女子	ラオス	2017年9月 ～2018年8月
5	バラミ・イッチャ	19	女子	ネパール	2018年10月 ～2019年8月
6	カムウォンサー・ウンニカー	20	女子	ラオス	2019年9月 ～2020年8月

(年齢はいずれも留学時)

ウドムスック・スリントーンさん

●2014年3月～2015年2月

ウドムスック・スリントーンさんは、ラオスの首都ビエンチャンの近郊の町で生まれ、通っていた小学校は日本か



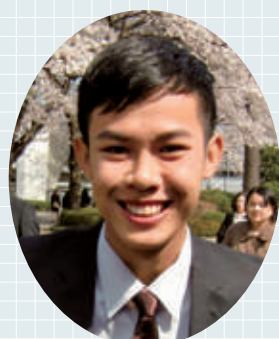
麗澤大学別科日本語研修課程
秋学期入学式(2014年9月10日)



麗澤大学別科日本語研修課程
修了パーティー(2018年8月3日)



「伝統の日」に出席した麗澤大学生と
ポーズ!(2018年6月2日)



ウドムスック・スリントーン さん

らの援助を受けており、小さいころから日本には親近感と憧れをいただいていた。そのことから、日本語を学びたいという強い意志もあり、大学も日本語学科を選んだということ。

スリントーンさんは、2014年4月末に開催された麗澤大学留学生歓迎懇親会では、留学生を代表して次のようにスピーチしました。

「私は、これから麗澤大学の別科日本語研修課程で一年間、日本語を勉強します。私の国ラオスの正式名称は『ラオス人民民主共和国』です。公用語はラオス語です。首都はビエンチャンです。ラオスはベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマー、中国に国境を接しています。ラオスには、豊かな天然資源があり、仏教を信仰する人が多く、昔から残っている建物や伝統的なお寺などもたくさんあります。赤道に近いので、とても暑い国です。季節は二つあります。雨季と乾季です。ラオス人は、いつも笑顔で親切な人々が多いと思います。そして、自分の文化や習慣などを今でも守り続けています。

日本は、ラオスに多くの支援をしている国の一つです。例えば、私が勉強していた小学校も日本から援助を受けています。その影響もあって、私は日本に興味があって、日本語を勉強することを決めました。日本語を勉強できて、とてもうれしいです。麗澤大学で留学生として日本語を勉強できるのは、私にとって大きなチャンスです。

私の目標は、自分の日本語の能力を向上させることです。この一年間、その目標達成のために、一生懸命日本語を勉強することと日本の文化や生活への理解を深めます。そして、いろいろな国の友だちとお互いに文化や考え方などを理解して交流し、ラオスへ帰ったら日本での経験を役立てたいと思います」

サイヤリン・プッタソーンさん

●2015年9月～2016年8月

サイヤリン・プッタソーンさんは、ラオスの南部サワンナケート県の出身です。留学中は麗澤大学内の学生寮で、日本人の学生や留学生と一緒に共同生活を送りました。友人からは「りんちゃん」の愛称で呼ばれ、寮生活を楽しみました。生活していた学生寮はとてもきれいで、また、キャンパス内の樹木はラオスで見かけないものが多く、とても新鮮に感じたそうです。

寮での食事は自炊でした。ラオスでは海水魚が高価なので、サンマや鮭などの海水魚は初めて口にするものばかりで、「とても美味しい」と感想を述べてくれました。

麗澤大学在学中には、日本語の研修のほかに、日本の文化や生活など多くのことを体験し、将来はラオスと日本の架け橋になれるよう期待されています。

「日本語を勉強するきっかけは、子供のころ、日本のドラマやアニメを見たことです。このころから日本に興味を持ち、日本語を学びたいと思いました。江戸時代のドラマ、特に忍者や侍の映画が好きで、一度日本に行ってみたいと思っていました。

私の将来の夢は大学院に進学し、ラオスで日本語の教師になることを考えています。ラオス人に日本語を教えたいと思っています。また、日本語能力試験N1に合格したいと思っています。

麗澤大学で留学生として日本語を勉強できるのは、私にとって大きなチャンスなので、麗澤大学で一生懸命勉強して、日本語能力を向上させ、それから、日本文化や生活への理解を深めたいと思います。そして、いろいろな国の人たちと友だちになって、一緒に新しい経験をし、いろいろな国の文化も学ぼうと思います。そうして、ラオスに帰ったら、日本語を勉強した経験を役立てたいと思います」



サイヤリン・プッタソーン さん



ブンタヴィー・サイヤー さん

ブンタヴィー・サイヤーさん

●2016年9月～2017年8月

ブンタヴィー・サイヤーさんは、ラオス北部のウドム・サイという町の出身です。サイヤーさんは日本語への学習意欲がとても旺盛で、ビエンチャンでは大学での授業のほかに日本料理店でアルバイトをしながら積極的に日本語を学んでいました。また、アルバイト先には日本人のみならず、各国の人たちが来店するので、日本語や英語で対応していたそうです。各国の人たちと積極的に話してみたいという下地があったので、麗澤大学の学生寮に入寮してからもすぐに各国の学生たちとも打ち解け、友だちを増やしました。

「何でもあって便利な日本に留学することができるのは、とても有り難いことだと感謝しています。私は将来、日本語の先生になり、ラオスと日本の架け橋になりたいと思っています。ラオスで日本語を3年間勉強しましたが、実際に日本人と話すチャンスが少なく、教科書だけで学ぶのは、もの足りないと思い、いつか日本へ留学して実際に日本の文化を体験したい気持ちが強くなっていました。このたび、夢がかなった1年間、麗澤大学の別科日本語研修課程で学ぶことになりました。1年間というのはとても短いと思いますが、一生懸命日本語を勉強して、日本の文化もたくさん体験しようと思っています。また、日本人や他の国から来た人たちとも友だちになって、楽しい生活をし、勉強も頑張ろうと思っています。帰国までに日本語能力試験のN2、N1を取りたいと思っています」

ルアンアパイ・ハナコさん

●2017年9月～2018年8月

ルアンアパイ・ハナコさんは、ラオスのビエンチャンの出身です。名前のハナコは、お父さんが旅先で病気になっ

たときに助けてくれたのが日本人だったことに感謝し、娘にはぜひ日本名を付けたいと願っていたことによります。ハナコさんも、小学生のころからアニメを見て日本に興味を持ち、日本語の勉強を始めました。高校進学に際して日本語の勉強を中断したこともありましたが、大学進学の際にお父さんから「日本語をもう一度、勉強したらどうか」と言われ、ラオス国立大学の日本語学科を受験して見事に合格しました。さらに2年生の学年末には日本への留学試験にも合格し、麗澤大学に留学することになりました。

「麗澤大学での授業はかなり難しく、テストもたびたび実施され、宿題も多く出されて、大変なこともあります。先生方は懇切丁寧に指導してくださり、図書館も充実していて、勉強するには最適な環境にあるということです。また、学内に新しい寮が完備され、6人のユニットルームにはリビング、キッチン、シャワーが完備され、快適に生活できます。さっそく日本人の友人もでき、日本語の分からないところを教えていただき、とても充実した留学生活を送っています。

日本のさまざまな場所に行って日本の歴史・文化を勉強し、日本の生活を体験し、日本と麗澤大学でのよい思い出をつくりたいと思います。ラオスには、日本のことが好きで、日本語を勉強したい人がたくさんいます。しかし、日本語を教える教員が足りません。私は、日本語を学びたい多くのラオス人に役立つために、将来は日本語の教師になりたいと願っています」

バラミ・イッチャさん

●2018年10月～2019年8月

バラミ・イッチャさんは、ネパール首都カトマンズの出身です。高等学校を卒業し、麗澤大学別科日本語研修課程修了後は日本の大学に進学する予定です。



ルアンアパイ・ハナコ さん



パラミ・イッチャ さん

「私は父から麗澤大学を紹介され、私の夢を叶えるチャンスくれたお父さんに感謝しています。私の夢を叶えるために、この一年はとっても大事な一年だと思っています。私は、二つの目標を持っています。一つ目は、日本語能力を高めることです。二つ目はネパールの大学にはない日本の大学で栄養学を学び卒業することです。私は栄養学を学べる大学に入るために勉強しています。大学卒業後は、ネパールに帰国し日本で学んだ栄養学の知識と経験を生かして、ネパールに貢献したいと思っています。そして、母国ネパールと日本をつなぐ架け橋になりたいと思います」

カムウォンサー・ウンニカーさん

●2019年9月～2020年8月



カムウォンサー・ウンニカー さん

カムウォンサー・ウンニカーさんは、ラオスのビエンチャンから来日しました。

「私の目標は日本語の教師になることです。ラオスには日本人が少ないので、日本語で話す機会がありません。日本語能力を高めるために日本へ留学したいと思いました。ラオスで日本語は、英語や中国語ほど人気がありません。『専門は何ですか』と尋ねられたとき、『日本語です』と答えると、びっくりした顔をされます。日本語を学ぼうと思ったきっかけは『僕のヒーローアカデミア』という漫画に出会ったことです。

留学の目標は、ラオスでできない経験をして、日本語能力試験N1に合格することです。昨年(2019年)12月に北海道に旅行し、生まれて初めて雪を見て感動しました。この春には関西を回り、伊勢神宮をお参りすることを楽しみにしています。

この一年間、頑張って勉強して、日本人とたくさん話して、日本人と友だちになって、日本にいるからできることをして、自分の目標を達成できるように頑張ります」

昭和46年3月16日 制定
平成25年4月 1日 改定

一般財団法人 麗澤海外開発協会 定款

第1章 総 則

(名 称)

第1条 この法人は、一般財団法人麗澤海外開発協会と称し、英文ではReitaku Overseas Development Association (略称「RODA」)と称する。

(事務所)

第2条 この法人は、主たる事務所を千葉県柏市に置く。

2 この法人は、理事会の決議により、従たる事務所を必要な地に置くことができる。

第2章 目的及び事業

(目 的)

第3条 この法人は、開発途上国において文化・経済の発展に協力するため、国際協力活動を通じて、世界の平和、人類の安心と幸福の増進に寄与することを目的とする。

(事 業)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 地域開発及び交流活動に関する事業
 - (2) 災害緊急支援に関する事業
 - (3) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
- 2 前項各号に規定する事業は、日本及び海外において行うものとする。

第3章 資産及び会計

(基本財産)

第5条 この法人の目的である事業を行うために不可欠な別表の財産は、この法人の基本財産とする。

- 2 基本財産は、この法人の目的を達成するために善良な管理者の注意をもって管理しなければならない、基本財産の一部を処分しようとするとき及び基本財産から除外しようとするときは、あらかじめ理事会及び評議員会の承認を要する。

(事業年度)

第6条 この法人の事業年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(事業計画及び収支予算)

第7条 この法人の事業計画書及び収支予算書については、毎事業年度開始の日の前日までに、会長が作成し、理事会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も、同様とする。

- 2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置くものとする。

(事業報告及び決算)

第8条 この法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を受けなければならない。

- (1) 事業報告
- (2) 事業報告の附属明細書

- (3) 貸借対照表
- (4) 正味財産増減計算書（損益計算書）
- (5) 貸借対照表及び正味財産増減計算書（損益計算書）の附属明細書
- 2 前項の承認を受けた書類のうち、第1号、第3号、第4号の書類については、定時評議員会に提出し、第1号の書類についてはその内容を報告し、その他の書類については承認を受けなければならない。
- 3 第1項の書類のほか、監査報告を主たる事務所に5年間備え置くとともに、定款を主たる事務所に備え置くものとする。

第4章 評議員

（評議員の定数）

第9条 この法人に評議員5名以上10名以内を置く。

（評議員の選任及び解任）

第10条 評議員の選任及び解任は、評議員選定委員会において行う。

- 2 評議員選定委員会は、評議員1名、監事1名、事務局員1名、次項の定めに基づいて選任された外部委員2名の合計5名で構成する。
- 3 評議員選定委員会の外部委員は、次のいずれにも該当しない者を理事会において選任する。
 - (1) この法人又は関連団体（主要な取引先及び重要な利害関係を有する団体を含む。以下同じ。）の業務を執行する者又は使用人
 - (2) 過去に前号に規定する者となったことがある者
 - (3) 第1号又は第2号に該当する者の配偶者、3親等内の親族、使用人（過去に使用人となった者も含む。）
- 4 評議員選定委員会に提出する評議員候補者は、理事会又は評議員会がそれぞれ推薦することができる。評議員選定委員会の運営についての細則は、理事会において定める。
- 5 評議員選定委員会に評議員候補者を推薦する場合には、次の事項のほか、当該候補者を評議員として適任と判断した理由を委員に説明しなければならない。
 - (1) 当該候補者の経歴
 - (2) 当該候補者を候補者とした理由
 - (3) 当該候補者とこの法人及び役員等（理事、監事及び評議員）との関係
 - (4) 当該候補者の兼職状況
- 6 評議員選定委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。ただし、外部委員の1名以上が出席し、かつ、外部委員の1名以上が賛成することを要する。
- 7 評議員選定委員会は、前条で定める評議員の定数を欠くこととなるときに備えて、補欠の評議員を選任することができる。
- 8 前項の場合には、評議員選定委員会は、次の事項も併せて決定しなければならない。
 - (1) 当該候補者が補欠の評議員である旨
 - (2) 当該候補者を1人又は2人以上の特定の評議員の補欠の評議員として選任するときは、その旨及び当該特定の評議員の氏名
 - (3) 同一の評議員（2人以上の評議員の補欠として選任した場合にあっては、当該2人以上の評議員）につき2人以上の補欠の評議員を選任するときは、当該補欠の評議員相互間の優先順位

- 9 第7項の補欠の評議員の選任に係る決議は、当該決議後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで、その効力を有する。

（評議員の任期）

- 第11条 評議員の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。
 - 2 任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了する時までとする。
 - 3 評議員は、第9条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお評議員としての権利義務を有する。

（評議員の報酬等）

第12条 評議員は無報酬とする。

第5章 評議員会

（構成）

第13条 評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

（権限）

- 第14条 評議員会は、次の事項について決議する。
 - (1) 理事及び監事の選任又は解任
 - (2) 計算書類等の承認
 - (3) 定款の変更
 - (4) 残余財産の処分
 - (5) 基本財産の処分又は除外の承認
 - (6) その他評議員会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

（開催）

第15条 評議員会は、定時評議員会として毎事業年度終了後3か月以内に開催するほか、必要がある場合に開催する。

（招集）

- 第16条 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき会長が招集する。
 - 2 会長に事故があるときは、あらかじめ理事会の定めた順序により他の理事が招集する。
 - 3 評議員は、会長に対し、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。

（決議）

- 第17条 評議員会の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。
 - 2 前項の規定にかかわらず、次の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる多数をもって行わなければならない。
 - (1) 監事の解任
 - (2) 定款の変更
 - (3) 基本財産の処分又は除外の承認
 - (4) その他法令で定められた事項
 - 3 理事又は監事を選任する議案を決議するに際しては、各候補者ごとに第1項の決議

を行わなければならない。理事又は監事の候補者の合計数が第19条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

(議事録)

- 第18条 評議員会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。
- 2 出席した評議員及び理事は、前項の議事録に記名押印する。

第6章 役員

(役員の設置)

- 第19条 この法人に、次の役員を置く。
- (1) 理事 5名以上10名以内
- (2) 監事 2名以内
- 2 理事のうち1名を会長とする。又、必要に応じて理事たる副会長1名を置くことができる。
- 3 前項以外の理事のうち、1名を常務理事とする。また、必要に応じて業務担当理事を置くことができる。
- 4 第2項で定める会長をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の代表理事とする。また、理事会の決議によって、第2項及び第3項で定める副会長及び常務理事1名をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の代表理事とすることができる。第3項で定める常務理事のうち代表理事以外の常務理事及び業務担当理事をもって同法第91条第1項第2号の業務執行理事とする。

(役員の選任)

- 第20条 理事及び監事は、評議員会の決議によって選任する。
- 2 会長、副会長及び常務理事、業務担当理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。

(理事の職務及び権限)

- 第21条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、職務を執行する。
- 2 代表理事は、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人を代表し、その業務を執行し、代表理事以外の常務理事並びに業務担当理事は、理事会において別に定めるところにより、この法人の業務を分担執行する。
- 3 代表理事以外の副会長は会長を補佐する。

(監事の職務及び権限)

- 第22条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。
- 2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、この法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

(役員の任期)

- 第23条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。
- 2 監事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。
- 3 補欠として選任された理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。

- 4 理事又は監事は、第19条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお理事又は監事としての権利義務を有する。

(役員の解任)

- 第24条 理事又は監事が、次のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。
- (1) 職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき。
- (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき。

(役員の報酬等)

- 第25条 理事及び監事は、無報酬とする。

第7章 理事会

(構成)

- 第26条 理事会は、すべての理事をもって構成する。

(権限)

- 第27条 理事会は、次の職務を行う。
- (1) この法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 会長、副会長及び常務理事、業務担当理事の選定及び解職
- (4) 評議員会の日時及び場所並びに目的である事項の決定
- (5) 規則の制定、変更及び廃止に関する事項

(招集)

- 第28条 理事会は、会長が招集する。
- 2 会長が欠けたとき又は会長に事故があるときは、副会長もしくは常務理事、業務担当理事が理事会を招集する。

(決議)

- 第29条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。
- 2 前項の規定にかかわらず、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第197条において準用する同法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。

(議事録)

- 第30条 理事会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。
- 2 出席した理事及び監事は、前項の議事録に記名押印する。

第8章 定款の変更及び解散

(定款の変更)

- 第31条 この定款は、評議員会の決議によって変更することができる。
- 2 前項の規定は、この定款の第3条及び第4条及び第10条についても適用する。

(解散)

- 第32条 この法人は、基本財産の滅失によるこの法人の目的である事業の成功の不能その他法令で定められた事由によって解散する。

(残余財産の帰属)

- 第33条 この法人が清算をする場合において有する残余財産は、評議員会の決議を経て、公

益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第9章 公告の方法

(公告の方法)

第34条 この法人の公告は、電子公告により行う。

- 2 事故その他やむを得ない事由によって前項の電子公告をすることができない場合は、官報に掲載する方法による。

第10章 事務局その他

(事務局)

第35条 この法人の事務を処理するため、事務局を設置し、事務局長及び所要の職員を置く。

- 2 事務局長及び職員は、会長が任免する。ただし、重要な使用人については、理事会の承認を要する。
- 3 事務局の組織及び運営に関し必要な事項は、理事会の決議により別に定める。

(賛助会員)

第36条 この法人の趣旨に賛同する個人又は会社、団体をこの法人の賛助会員とすることができる。

- 2 賛助会員に関する事項は、理事会の決議により別に定める。

(委 任)

第37条 この定款に定めるもののほか、この法人の運営に関し必要な事項は、理事会の決議により別に定める。

附 則

- 1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第121条第1項において読み替えて準用する同法第106条第1項に定める一般法人の設立の登記の日から施行する。
- 2 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第121条第1項において読み替えて準用する同法第106条第1項に定める特例民法法人の解散の登記と一般法人の設立の登記を行ったときは、第6条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。
- 3 この法人の最初の会長は廣池幹堂とする。

別表 基本財産(第5条関係)

財産種別	場所・物量等
金融資産	三菱UFJ銀行 大口定期預金

麗澤海外開発協会 活動年譜

年 月 日	主 な 事 項
1964年	奥平定世（麗澤大学教授）、ラオス王国のビエンチャン商工会議所会頭カンバイ・ピラパンデ氏から農業開発指導の要請を受ける。
3月	奥平定世、井田孝（麗澤高等学校定時制主事）による現地調査を行う。
6月	廣池千太郎（道徳科学研究所次長、麗澤大学助教授）、奥平定世、長谷虎治（道徳科学研究所評議員、長谷虎紡績株式会社社長）の一行がラオス農場を視察。
11月	池田信輔（廣池学園職員）、杉本滋（廣池学園職員）をラオス王国ビエンチャンのレイタク・カンバイ農場に派遣する。
1968年	1月 廣池千英（道徳科学研究所所長、麗澤大学学長）、廣池千太郎、奥平定世等、アジア会館理事長・岩田喜雄氏を訪問。財団設立に関しての指導を受ける。
4月	平塚益徳（国立教育研究所所長、九州大学名誉教授）、小泉喜平（国立教育研究所アジア地域教育研修室長）両氏が教育事情視察の際にレイタク・カンバイ農場を訪問。廣池学園理事長・廣池千英が財団設立の意志を発表。道徳科学研究所ならびに廣池学園の各理事会で当財団設立に際して寄付を行うことを議決。
5月	外務省において下田吉人・駐ラオス大使と奥平定世が面接。当法人派遣の池田信輔の業績が高く評価され、財団設立の助言を受ける。設立発起人（廣池千英、廣池千太郎、十川栄、小山政男、松浦香、杉本清次郎、宗武志、長谷虎治）を発表。
8月	財団法人道徳科学研究所所長・学校法人廣池学園理事長の廣池千英逝去。廣池千太郎、新所長ならびに新理事長に就任。
11月	アジア会館理事長・岩田喜雄氏に財団設立の計画を報告。
1969年	1月 カンバイ氏とラケオ氏（ラオス人）を財団設立事業計画等の打ち合わせのため日本に招待。設立財団の名称を「財団法人麗澤海外開発協会」と内定し、理事、監事、評議員を内定。
2月	ラオス駐日大使館より夕食会の招待を受け、ビエンチャンにおける桑園造成ならびに技術援助に対して謝意を受ける。
4月	青木丈幸、今井收（海外開発指導要員）を千葉県蚕業試験場主催の蚕糸養成講習に派遣。
8月	淡島成高（海外開発指導要員）をビエンチャンのレイタク・カンバイ農場に派遣。
1970年	2月 青木丈幸、今井收をビエンチャンのレイタク・カンバイ農場に派遣。
11月	技術開発室の井田孝がラオスへ出張、現地を視察し打ち合わせを行う。
1971年	3月 現地責任者の淡島成高が、現地で立案した計画書・収支予算書を持って帰国。
3月16日	外務省より財団法人の認可を受ける。
3月20日	千葉県庁より財団法人認可の通達を受ける
4月23日	岐阜県瑞浪市の瑞浪高原ゴルフ場クラブハウスにおいて第1回(勸)麗澤海外開発協会理事会を開催。
5月24日	東京・帝国ホテルにおいて財団法人設立の披露を行う。チャオ・ニット・ノーカム駐日ラオス大使をはじめ、内外多数の来賓が臨席。
7月14日	群馬県利根郡水上町谷川の廣池学園谷川講堂において(勸)麗澤海外開発協会理事会を開催。
8月22日	淡島成高を現地責任者としてラオスへ再派遣。
1972年	1月23日 清水芳洋が千葉県農業機械化研修所、農業試験場で研修。
1月27日	タイ養蚕センターのプロジェクト・リーダー大村清之助氏と東嘉昭氏が在ラオス日本大使館の要請によりラオス蚕糸業予備調査のために来園、農場の視察をされる。
2月26日	レイタク・カンバイ農場で蚕室等の地鎮祭を行う。

年 月 日		主 な 事 項
1972年	3月6日	事業管理室の田島政芳、技術開発室の井田孝がラオスへ出張、関係者との打ち合わせを行う。
1973年	4月1日	清水芳洋が青年海外協力隊の園芸担当派遣員としてラオスへ着任する。
1974年	8月25日	山口明が畜産専門家として現地へ派遣される。
	12月27日	淡島成高が帰国。
1975年		ラオスの王制廃止、人民民主共和国が樹立。
	4月	農林省養蚕園芸局長宛に海外投資状況調査報告書を提出。
	11月	ラオスの製糸に関する覚書を提出。
	6月1日	青木丈幸が帰国、千葉県薊検定所や恵南産業株式会社において製糸技術の研修を行う。
	7月16日	ラオス養蚕センターへ出向中の養蚕専門家・池田信輔が休暇のため一時帰国。8月15日、ラオスに帰任。
	10月8日	協会職員の松本哲洋が、海外子女教育振興財団よりラオス・ビエンチャン日本人学校の教諭を委嘱され赴任。
1976年	3月1日	協会より青年海外協力隊に出向中の清水芳洋が一時帰国。31日、ラオスに帰任。
	3月18日	奥平定世常務理事がラオス情勢ならびにレイタク・カンバイ農場の運営状況視察のためラオスへ出張。
	3月30日	今井收、山口明が奥平常務理事とともに帰国。
	7月5日	千葉県柏市の廣池学園において(財)麗澤海外開発協会理事会・評議員会を開催。ラオス養蚕開発事業の完全撤収の具体的業務の推進について協議し、事業撤収を決定。
1977年	1月27日	青木丈幸が帰国。
	3月31日	青年海外協力隊員としてラオスに出向中の清水芳洋が帰国。
	10月	アメリカ・サリナスにおけるモラロジー開発活動を促進するという関連から、コスタリカ花卉栽培事業が提案される。
1978年	1月	コスタリカ農業基礎資料収集を目的として調査団を組む(アメリカにおいて藤村義朗理事、内田善一郎氏ほか3名)。
	3月	日本より調査団(長谷虎治副会長、藤村義朗理事、岩坂喜一理事)を組み、コスタリカを訪問し、コスタリカ花卉栽培事業の有望性を確認。
	7月	国際協力事業団より、コスタリカ花卉栽培事業として、融資が受けられることを確認。
	9月	現地法人のレイタク・コスタリカ株式会社を設立(社長：長谷虎治／副社長：藤村義朗・赤塚充良／専務：岩坂喜一・内田善一郎)。
	12月21日	奈良賀男駐コスタリカ大使が廣池学園来園。
1979年	3月	国際協力事業団から融資検討のための現地調査団が派遣される。当協会から井田孝、山中正義の2名もこの調査団の一員として加わる。花卉栽培に適しているという判断が下る。
	6月	コスタリカ・サンホセ州サンタアナ市コンセプションの土地を購入。
	8月	山中正義、現地法人副支配人としてコスタリカへ渡航。
	9月	国際協力事業団より1年目の融資を受ける。引き続き第1農場の造成工事が開始される。
1980年	1月	鷺津邦男、レイタク・コスタリカ株式会社専務として出向。
	2月	国際協力事業団から調査団が派遣される。
		建設契約を現地建設会社エディフィカトリア(株)と結ぶ。
	3月	コスタリカ人口ベルト氏が研修生として日本において研修を受ける(3月～8月、於：赤塚植物園)。
	10月	職員・名輪辰一郎、研修職員・浜田和雅を海外研修生としてコスタリカへ派遣(1983年1月に帰国)。

年 月 日		主 な 事 項
1981年	1月	京都大学・河瀬晃四郎助教授、国際協力事業団から開発協力専門家として1年間レイタク・コスタリカ(株)に派遣される。
	3月	事業計画・収支予算案を立案、理事会を開催。
	7月	(株)アミスター・ジャパン社員の木原武義、二神均氏をレイタク・コスタリカ(株)に派遣。
	7月25日	レイタク・コスタリカ(株)第一農場においてレイタク・ガーデンの開園式が行われる。
	9月	レイタク・コスタリカ(株)役員会を開催。山中正義氏を現地総責任者の支配人に任命する。
	9月2日	コスタリカ共和国のフォンセカ農牧大臣ご夫妻が廣池学園来園。
	12月	関哲夫をレイタク・コスタリカ(株)へ出向。石元喬を海外研修生としてコスタリカへ派遣。レイタク・コスタリカ(株)第3農場用地を購入。
1982年	1月	第3農場の建設に着手する。石川県立農業短期大学・土屋照二助教授、国際協力事業団から開発協力専門家としてレイタク・コスタリカ(株)へ技術指導のため着任。
		京都大学農学部・河瀬晃四郎助教授はレイタク・コスタリカ(株)における1年間の技術指導を終えて帰国。鷺津邦男、レイタク・コスタリカ(株)への出向を終えて帰国。
	2月	国際協力事業団において河瀬晃四郎助教授の報告会を開催する。
	5月	レイタク・コスタリカ(株)が申請中の輸出免税許可が認可される。併せて15%の輸出奨励金がコスタリカ共和国より出ることとなる。
		事業の一部変更を国際協力事業団へ申請する。
		技術者としてヘラルド・ビンズが入社。二神均とともに生産技術管理を担当する。
	11月	廣池英行をレイタク・コスタリカ(株)へ出向。村上明民、遠藤勝徳を海外研修生としてコスタリカへ派遣する。
		サラピキ第2農場を売却する。
	12月	吉岡俊裕、松尾慶太を海外研修生としてコスタリカへ派遣(共に1984年9月に研修を終了して帰国)。
1983年		アメリカへの薬物輸出事業を開始する。
		観葉植物の日本へのコンテナ輸入を開始する。
	2月	石川県立農業短期大学・土屋照二助教授は1年間の技術指導を終えて帰国。
	3月	大阪府立大学理学部・立花吉茂教授、国際協力事業団から開発協力専門家としてレイタク・コスタリカ(株)へ技術指導のため着任。
1984年	1月	大阪府立大学理学部・立花吉茂教授は約1年間の技術指導を終えて帰国。
	5月	国際協力事業団による花卉栽培試験事業に対する最終調査が行われる。
	10月15日	コスタリカ共和国の前大統領ロドリゴ・カラソ氏が廣池学園来園。
1985年	3月	関哲夫経理担当が任期満了で帰国。山中支配人が退社。廣池英行が現地法人代表権の登記を行い、現地代表・支配人として就任。
	12月	村上明民と石元喬がレイタク・コスタリカ(株)に入社。アメリカ、日本への輸出が順調に創立以来初の黒字決算を出す。ヨーロッパへの薬物輸出事業を開始する。
1986年		年間輸出高が100万ドルを突破。
		若林浩司と奥村修を研修生としてコスタリカへ派遣する。パナマ・オペレーションを開始し、返済原資の海外蓄積を行う。
1987年		若林浩司と奥村修が帰国。
		パナマ動乱。パナマの銀行口座をニューヨークへ移管して返済原資蓄積オペレーションを継続する。
1988年		廣池英行が代表取締役副社長に就任する。
		野中均をレイタク・コスタリカ(株)へ出向。野中均が現地支配人に就任する。

年 月 日		主 な 事 項
1989年		石元喬が契約満了で退社し帰国。
		井村隆伸が技術担当者として入社。
		廣池英行、野中均が帰国。
1990年		村上明民が現地支配人として就任。
1991年	3月	理事会において事業の閉鎖を決定。
	11月	サンタアナ第1農場をコスタリカ大学へ寄贈。贈呈式を行う。
		アラフェラ第3農場をコスタリカ政府へ寄贈。贈呈式を行う。
1992年	10月	事業計画検討委員会を設置。今後の事業内容を再検討する。
		ネパールの東洋医学専門学校（OTTC）を視察。支援活動内容を検討。
		タイのメーコック・ファーム（現・メーコック財団）を視察。支援活動内容を検討。
1993年		ネパールのティテパティよもぎの会へ畑美奈栄氏を鍼灸治療専門家（指導者）として派遣する。東洋医学専門学校（OTTC）への支援を開始する。
		ティテパティよもぎの会のラムマニ・カティワダ氏（現地スタッフ）を滋賀県のもぐさメーカー（株）山正への第1期研修生として日本へ招聘する。
1994年		ティテパティよもぎの会のイスワル・ラズ・バラミ氏（現地スタッフ）を（株）山正への第2期研修生として招聘する。
1995年		ネパールの東洋医学専門学校の校舎増設を支援。4階建校舎が完成する。
1996年		東洋医学専門学校の第1回卒業式が行なわれる。廣池幹堂会長の代理として、木下廣太郎が出席。卒業生に「モラロジー賞」を授与する。
1997年		ティテパティよもぎの会現地スタッフ、イスワル・ラズ・バラミ氏を国内鍼灸院の研修生として日本に招聘する。
		ティテパティよもぎの会第1期プロジェクトを終了する。東洋医学専門学校をネパール赤十字へ寄贈。
		ティテパティよもぎの会がネパール社会福祉省から国際NGOとして認可される。
1998年		ティテパティよもぎの会第2期プロジェクトとしてヘルス・キャンプを開始。
		麗澤大学外国語学部日本語学科卒業生・田中靖子を現地事務局スタッフとしてネパールへ派遣する。
		ティテパティよもぎの会現地スタッフ、サヌ・ナニ・バラミ氏を国内鍼灸院への研修生として日本に招聘する。
2000年		ティテパティよもぎの会代表畑美奈栄氏が第28回「医療功労賞海外部門、厚生大臣賞」を受賞される。廣池学園れいたくキャンパスプラザで受賞祝賀会を開催する。
		ティテパティよもぎの会現地スタッフ、カジェンドラ・ビクラム・スヌワル氏を日本に招聘。手技療法治療院で研修を受ける。
2001年		ビシャール・シュレスタ氏を日本へ招聘。手技療法治療院で研修を受ける。
		イスワル・ラズ・バラミ氏およびデネッシュマン・ラケ氏を日本に招聘。もぐさ製造に関する技術研修を受ける。
2002年	7月	タイ王国北部チェンライ県で生活が困窮している少数民族の子供の生活・教育支援施設の運営を行っているメーコック財団における指導員として関口輝比古を派遣（～2004年6月）。
2003年		竹原茂（当協会の理事・副会長を歴任）の名を冠した「竹原基金」を設ける。
		カトマンズ市郊外に建設される「もぐさ工場兼クリニック」の建設に対して助成を行った。
	11月	『麗澤海外開発協会会報（RODAニューズレター）』を創刊。
2004年	2月	ネパール・スタディツアーを実施して、ティテパティよもぎの会が実施する鍼灸による無医村への巡回治療ボランティア等を体験学習し、ネパール社会の現状理解を深めた（2月6～18日・参加者6名）。

年 月 日		主 な 事 項
2004年	4月	日本大使館や当協会の協力を得てカトマンズ市郊外のチャランケル村に建設された「クリニック兼もぐさ工場」が竣工。4月25日の竣工式に廣池英行理事、木下廣太郎理事、白木和彦評議員、望月雄二評議員が出席。ティテパティよもぎの会の新しい活動がスタート。
2005年		チェンライ・ラチャパット大学日本語学科の渡辺朋子講師（麗澤大学卒）に委託して、メーコック財団への定期的（1か月に2回）な活動支援を行った（～2006年10月）。
	2月	主にチェンマイ、チェンライにおけるタイ・スタディツアーを実施し、海外ボランティア活動を体験学習して、タイ社会の現状理解を深めた（2月13日～20日・参加者4名）。
	10月	タイ北部視察旅行を実施し、現地における教育施設・教育現場等を視察した（10月28日～11月3日／横山守男評議員・小林良平職員等・全4名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の少数民族の村を視察し、教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）に職員を派遣し、ツアーの運営をサポートした（12月21日～29日・参加者15名）。
2006年	2月	バンコク、チェンマイ、チェンライ等におけるタイ・スタディツアーを実施し、海外ボランティア活動を体験学習して、タイ社会の現状理解を深めた（2月12日～19日・参加者14名）。
	9月	タイ北部のメーコック財団における茶の生産計画の指導と検討のため、現地調査を行った（9月5日～6日／白木貞一郎評議員をはじめ茶生産業・牛肥育業等の専門家・全5名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の少数民族の村を視察し、教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）に職員を派遣し、ツアーの運営をサポートした（12月20日～28日・参加者13名）。
2007年	2月	タイで活動する支援団体の状況を視察し、ボランティア研修を通して現地の状況および国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月5日～13日・参加者12名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の少数民族の村を視察し、教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）に職員を派遣し、ツアーの運営をサポートした（12月20日～28日・参加者9名）。
2008年		ミャンマー・サイクロン（5月）の被災者および中国・四川大地震（5月12日）の被災者に対して日本UNHCR協会（UNHCR＝国連難民高等弁務官事務所）を通じて緊急支援を行った。
	2月	当協会が支援するラオスのタート・インハン小学校校舎の再建現場等を視察し、タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるためにラオス・タイ・スタディツアーを実施した（2月11日～19日・参加者15名）。
	4月	MIRC（モラロジー国際救援運動推進委員会）の事業を統合し、カンボジアにおける学校建設とスタディツアー、ネパールにおける医療クリニック等への支援を引き継いで推進。
	8月	ラオスのタート・インハン小学校校舎の贈呈式への参加とタイ北部でのボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、麗澤大学生によるスタディツアーに職員を派遣し、その実施をサポートした（8月18日～30日・参加者7名）。
	8月20日	ラオスのタート・インハン小学校校舎の贈呈式に、木下廣太郎常務理事、廣池英行理事、渡辺朋子事務局員、麗澤大学生5名が参列。
	9月28日	アジアの子供たちへの教育支援を目的に、千葉県市川市の行徳文化ホールにおいて第1回「チャリティーコンサート」を開催（参加者380名）。
2009年	8月	当協会が支援する「ティテパティよもぎの会」のスタディツアー（ヘルスクャンプ）開催への支援と協力を行った（8月19日～25日・参加者9名・治療患者数2,275名）。
		タイ北部におけるボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるための麗澤大学生によるスタディツアーに職員を派遣し、その実施をサポートした（8月20日～31日・参加者7名）。
	11月	ネパール人鍼灸専門家2名（イスワル・ラズ・バラミ氏、ビシャール・シュレスタ氏）を日本に招聘し、技術向上のための研修およびネパールの鍼灸治療の現状報告会を行った（11月11日～24日）。
2010年		ハイチ地震（1月12日）の被災者に対して日本UNHCR協会を通じて緊急支援を行った。

年 月 日		主 な 事 項
2010年	2月	タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月7日～15日・参加者8名）。
	8月	「ティテパティよもぎの会」のスタディツアー（ヘルスキャンプ）開催への支援と協力を行った（8月14日～23日・参加者12名・治療患者数3,656名）。
		ラオスにおけるボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるための麗澤大学生によるラオス・スタディツアーに職員を派遣し、その実施をサポートした（8月20日～31日・参加者18名）。
2011年	9月	校舎を建設したカンボジアのトム・オー小学校の運営を視察し、現地の人たちとの交流を通じて国際協力活動への理解を深めるためにカンボジア・スタディツアーを実施した（9月5日～12日・参加者5名）。
		カンボジアのコンポントム州にあるベン・ロヴィア・レー小学校の校舎を建設した。
	2月	ラオスのタート・インハン小学校における図書館建設の贈呈式への参加および支援団体の状況視察とボランティア研修を通して国際協力活動への理解を深めるため、ラオス・スタディツアーを実施した（2月12日～20日・参加者7名）。
	8月	「ティテパティよもぎの会」のスタディツアー（ヘルスキャンプ）開催への支援と協力を行った（8月19日～29日・参加者17名）。
		タイ北部におけるボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるための麗澤大学生によるタイ・スタディツアーへの支援と協力を行った（8月23日～9月3日・参加者16名）。
	11月3日	ラオスのシートン・チンヨーティン特命全権大使ご夫妻が麗澤大学に来訪、校舎や麗陵祭（大学祭）等を見学し、学生との懇談会も行った。
	12月3日	アジアの子供たちへの教育支援を目的に、東京都千代田区の内幸町ホールにおいて第2回「チャリティーコンサート」を開催（参加者200名）。
2012年	12月	カンボジアのコンポントム州にあるベン・ロヴィア・レー小学校校舎の贈呈式への参加と現地調査のために、堀内一史理事と松本彰夫事務局員が渡航（12月20日～23日）。
	8月	タイ北部におけるボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるための麗澤大学生によるタイ・スタディツアーに職員を派遣し、その実施をサポートした（8月22日～31日・参加者8名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の少数民族の村を視察し、教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）に職員を派遣し、ツアーの運営をサポートした（12月20日～28日・参加者8名）。
2013年		麗澤大学で受け入れているブータンからの留学生に対して、麗澤大学国際交流センターと連携をとりながら支援を行った。
		フィリピン台風（2013年11月）の被災者に対して、国連UNHCR協会を通じて緊急支援を行った。
	2月	ラオスにおける支援団体の現状視察とボランティア研修を通して国際協力活動への理解を深めるため、ラオス・スタディツアーを実施した（2月7日～15日・参加者9名）。
	4月	内閣府より一般財団法人に認可される。
	8月	タイ北部におけるボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるための麗澤大学生によるスタディツアーに職員を派遣し、その実施をサポートした（8月21日～30日・参加者8名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）に職員を派遣し、ツアーの運営をサポートした（12月20日～27日・参加者17名）。
2014年		ラオス（ラオス国立大学）からの留学生（ウドムスック・スリントーンさん）を招聘し、麗澤大学別科日本語研修課程で学び生活するための支援を行った（2014年3月～2015年2月）。
		麗澤大学で受け入れているブータンからの留学生に対して、麗澤大学国際交流センターと連携をとりながら支援を行った。

年 月 日		主 な 事 項
2014年	2月	ラオスにおける支援団体の現状視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、ラオス・スタディツアーを実施した（2月18日～24日・参加者6名）。
	12月7日	アジアの子供たちへの教育支援を目的に、東京都千代田区の内幸町ホールにおいて第3回「チャリティーコンサート」を開催（参加者150名）。
2015年		ラオス（ラオス国立大学）からの留学生（サイヤリン・ブッタソーンさん）を招聘し、麗澤大学別科日本語研修課程で学び生活するための支援を行った（2015年9月～2016年8月）。
		麗澤大学で受け入れているブータンからの留学生に対して、麗澤大学国際交流センターと連携をとりながら支援を行った。
		ラオス国立大学文学部日本語学科図書館へ日本語の書籍（580冊）を寄贈した。
		4月25日に発生したネパール大地震の被災者に対して緊急支援を行い、併せて緊急募金を募って「ティテパティよもぎの会」とアネコット村への支援を行った。
	2月	タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月10日～19日・参加者10名）。
	8月	タイ北部におけるボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるための麗澤大学生によるタイ・スタディツアーの実施をサポートした（8月20日～29日・参加者10名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）の実施をサポートした（12月20日～28日・参加者8名）。
2016年		ラオス（ラオス国立大学）からの留学生（ブンタヴィー・サイヤーさん）を招聘し、麗澤大学別科日本語研修課程で学び生活するための支援を行った（2016年9月～2017年8月）。
		麗澤大学で受け入れているブータンからの留学生に対して、麗澤大学国際交流センターと連携をとりながら支援を行った。
	2月	タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月16日～24日・参加者10名）。
		ネパール大地震の復興ボランティア活動を目的に麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻（IEC）の学生が企画・実施したツアーへの支援を行った（2月16日～26日・参加者4名）。
	3月	当協会が支援しているカンボジアの3小学校（トラム・クラ、ベン・ロヴィア・レー、トム・オー）におけるボランティア活動を目的に麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻（IEC）の学生が企画・実施したツアーへの助成を行った（3月15日～25日・参加者6名）
	8月	タイ北部におけるボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるための麗澤大学生によるタイ・スタディツアーの実施をサポートした（8月22日～31日・参加者6名）。
	9月	カトマンズ市（ネパール）の小中学校での減災授業と震災復興ボランティア活動を目的に麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻（IEC）の学生が企画・実施したツアーへの助成を行った（9月5日～10日・参加者3名）
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）の実施をサポートした（12月21日～29日・参加者20名）。
2017年		ラオス（ラオス国立大学）からの留学生（ルアンアパイ・ハナコさん）を招聘し、麗澤大学別科日本語研修課程で学び生活するための支援を行った（2017年9月～2018年8月）。
		麗澤大学で受け入れているブータンからの留学生に対して、麗澤大学国際交流センターと連携をとりながら支援を行った。
	2月	カンボジアのトム・オー小学校における出前授業とボランティア活動を目的に麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻（IEC）の学生が企画・実施したツアーへの助成を行った（2月5日～18日・参加者9名）。
		タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月15日～24日・参加者7名）。
		カトマンズ市（ネパール）の小中学校での減災授業と震災復興ボランティア活動を目的に麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻（IEC）の学生が企画・実施したツアーへの助成を行った（2月22日～3月3日・参加者5名）。

年 月 日		主 な 事 項
2017年	8月	カトマンズ市（ネパール）の小中学校での減災授業と震災復興ボランティア活動を目的に麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻（IEC）の学生団体（Be a Bridge!）が企画・実施したツアーへの助成を行った（8月18日～27日・参加者12名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）の実施をサポートした（12月21日～29日・参加者18名）。
2018年		ネパールから留学生（パラミ・イッチャさん）を招聘し、麗澤大学別科日本語研修課程で学び生活するための支援を行った（2018年10月～2019年8月）。
	2月	カンボジアのトム・オー小学校に寄贈した堀の贈呈式への参列（木下廣太郎常務理事、小西直之理事、俣野幸昭監事）と同校での出前授業およびボランティア活動を目的に麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻（IEC）の学生団体（Plas+）が企画・実施したツアーへの助成を行った（2月7日～18日・参加者15名）。
		タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月20日～3月1日・参加者6名）。
	8月	麗澤大学の学生団体（Be a Bridge!）が企画した海外ボランティア活動（カトマンズ市において衛生問題についての啓発活動やワークショップを行う）に対して助成を行った（8月23日～30日・参加者6名）。
	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）の実施をサポートした（12月21日～29日・参加者15名）。
2019年		ラオス（ラオス国立大学）からの留学生（カムウォンサー・ウンニカーさん）を招聘し、麗澤大学の特別聴講生として学び生活するための支援を行った（2019年9月～2020年8月）。
	2月	当協会が支援しているカンボジアの3小学校におけるボランティア活動（出前授業や運動会を行い児童や教員と交流）を目的に麗澤大学の学生団体（Plas+）が企画・実施したツアーへの助成を行った（2月5日～20日・参加者19名）。
		タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月19日～27日・参加者10名）。
		麗澤大学の学生団体（Be a Bridge!）が企画した海外ボランティア活動（カトマンズ市において衛生問題についての啓発活動やワークショップを行う）に対して助成を行った（2月26日～3月9日・参加者6名）。
	8月	麗澤大学の学生団体（Be a Bridge!）が企画した海外ボランティア活動（カトマンズ市において衛生問題についての啓発活動やワークショップを行い、中高校において日本文化の授業を行う）に対して助成を行った（8月28日～9月7日・参加者10名）。
2020年	12月	麗澤高等学校のタイ・スタディツアー（主にタイ北部の教育支援施設・メーコック財団におけるボランティア活動等を体験学習する）の実施をサポートした（12月21日～29日・参加者15名）。
		コロナ禍の影響を受けた運営状況にあるタイ北部のメーコック財団に対して、毎年行っている支援に加えて緊急支援を行った。
		タイ・バンコクの貧困地域において識字教育、移動図書館、職業訓練等の教育支援活動を実施するJapan International Labour Foundation-Thailand（JILAF）に対する支援を開始した。
	1月	ネパールのアネコット村（カトマンズ北東70キロ）で3度の豪雨被害（8月、9月、10月）に見舞われて一部通行不能となった通学路の復旧のための緊急支援を行った。
	2月	当協会が支援しているカンボジアの3小学校におけるボランティア活動（出前授業や運動会を行い児童や教員と交流）を目的に麗澤大学の学生団体（Plas+）が企画・実施したツアーへの助成を行った（2月5日～20日・参加者19名）。
		タイ北部で活動する支援団体の視察とボランティア研修を通じて国際協力活動への理解を深めるため、タイ・スタディツアーを実施した（2月12日～20日・参加者6名）。
		麗澤大学の学生団体（Be a Bridge!）が企画した海外ボランティア活動（カトマンズ市において衛生問題についての啓発活動やワークショップを行い、中高校において日本文化の授業を行う）に対して助成を行った（2月13日～2月27日・参加者12名）。
	2022年 3月	当協会の創立50年を記念した『麗澤海外開発協会 50年の歩み』を編集・発行。

（2022年2月現在）

一般財団法人 麗澤海外開発協会					歴代役員一覧			(2013年3月まで：財団法人)		
					役職		氏名		就任期間（西暦年度）	
会 長	廣池千太郎	1971～1988			副 会 長	長谷 虎治	1971～1991			
	廣池 幹堂	1989～				田島 政芳	1992～1995			
				岩田 啓成		1996～2007				
			柴田 英輔	2008～2009						
			竹原 茂	2010～2020						
常務理事	小山 政男	1971～1979			常務理事	鷺津 邦男	2000～2003			
	奥平 定世	1971～1979				柴田 英輔	2004～2007			
	藤村 義朗	1980～1983				木下廣太郎	2008～2020			
	岩坂 喜一	1980～1989				濱島 直隆	2021～			
	宮嶋 邦彦	1990～1999								
理 事	伊藤 忠也	1971～1975			理 事	石田 隆一	1990～1997			
	岩坂 国夫	1971～1975				高倉 護	1990～1999			
	大磯 隆吉	1971～1979				谷川 誠士	1990～1995			
	杉本清次郎	1971～1983				坂田 真吉	1992～1995			
	宗 武志	1971～1983				谷口 茂	1992～2003			
	十川 栄	1971～1979				鷺津 邦男	1992～1999			
	西村 増蔵	1971～1973				三井 実	1996～2007			
	松浦 香	1971～1975				竹原 茂	1998～2009			
	三輪 勝雄	1971～1975				柴田 英輔	2000～2003			
	御法川 博	1971～1975				木下廣太郎	2002～2007			
	宮嶋 芳平	1971～1985				藤村 薫	2004～2007			
	岩坂 喜一	1976～1979				廣池 英行	2004～2011			
	高畑 太一	1976～1985				甲良 昭彦	2008～2011／2015～2020			
	田島 政芳	1976～1979				関 哲夫	2008～2011			
	林 義人	1976～1983				望月 雄二	2008～2014			
	藤村 義朗	1976～1979				横山 守男	2008～2009			
	赤塚 充良	1980～2001				堀内 一史	2010～2018			
	香西 利信	1980～1983				小西 直之	2012～			
	長谷川浩二	1980～1983／1986～1989				白木貞一郎	2012～2015			
	廣池英二郎	1980～1995				濱井 利一	2012～2018			
	樋口 幸夫	1980～1987				俣野 幸昭	2011～2012			
	村岡 有尚	1980～1983／1990～1994				中川 敏彰	2013～2015			
	内田善一郎	1984～1991				土谷 和光	2015～2020			
	小泉 喜平	1984～1989				桑島 義智	2019～			
	宮嶋 邦彦	1986～1989				濱島 直隆	2019～2020			
	山本 善三	1986～1989				廣池加津子	2020～			
	大野 裕朗	1988～1997				村田 光生	2021～			

(2022年2月現在)

一般財団法人 麗澤海外開発協会 歴代役員一覧 (2013年3月まで：財団法人)

役職 氏名 就任期間 (西暦年度)

監 事	内田 武男	1971～1979	監 事	石丸 潤一	1996～2001
	笥 五一	1971～1975		甲良 昭彦	2002～2007
	鈴木 愛吉	1980～1989		長谷 篤治	2008～
	田島 政芳	1980～1991		横山 守男	2010～2012
	山本 善三	1990～1995		俣野 幸昭	2013～
	永治 千冬	1992～1999			

麗澤海外開発協会 50年の歩み

2022年3月25日 発行

発行／一般財団法人麗澤海外開発協会

〒277-0065 千葉県柏市光ヶ丘2丁目1-1
TEL.04-7173-3165 FAX.04-7173-8953
E-mail : kaikyo@ad.reitaku-u.ac.jp
<https://www.reitaku.or.jp/>

編集／麗澤海外開発協会50年史編集委員会

デザイン／株式会社エヌ・ワイ・ピー

印刷／横山印刷株式会社

©Reitaku Overseas Development Association, 2022

編集委員会 ● 委員長：横山守男

委員：木下廣太郎・甲良昭彦

